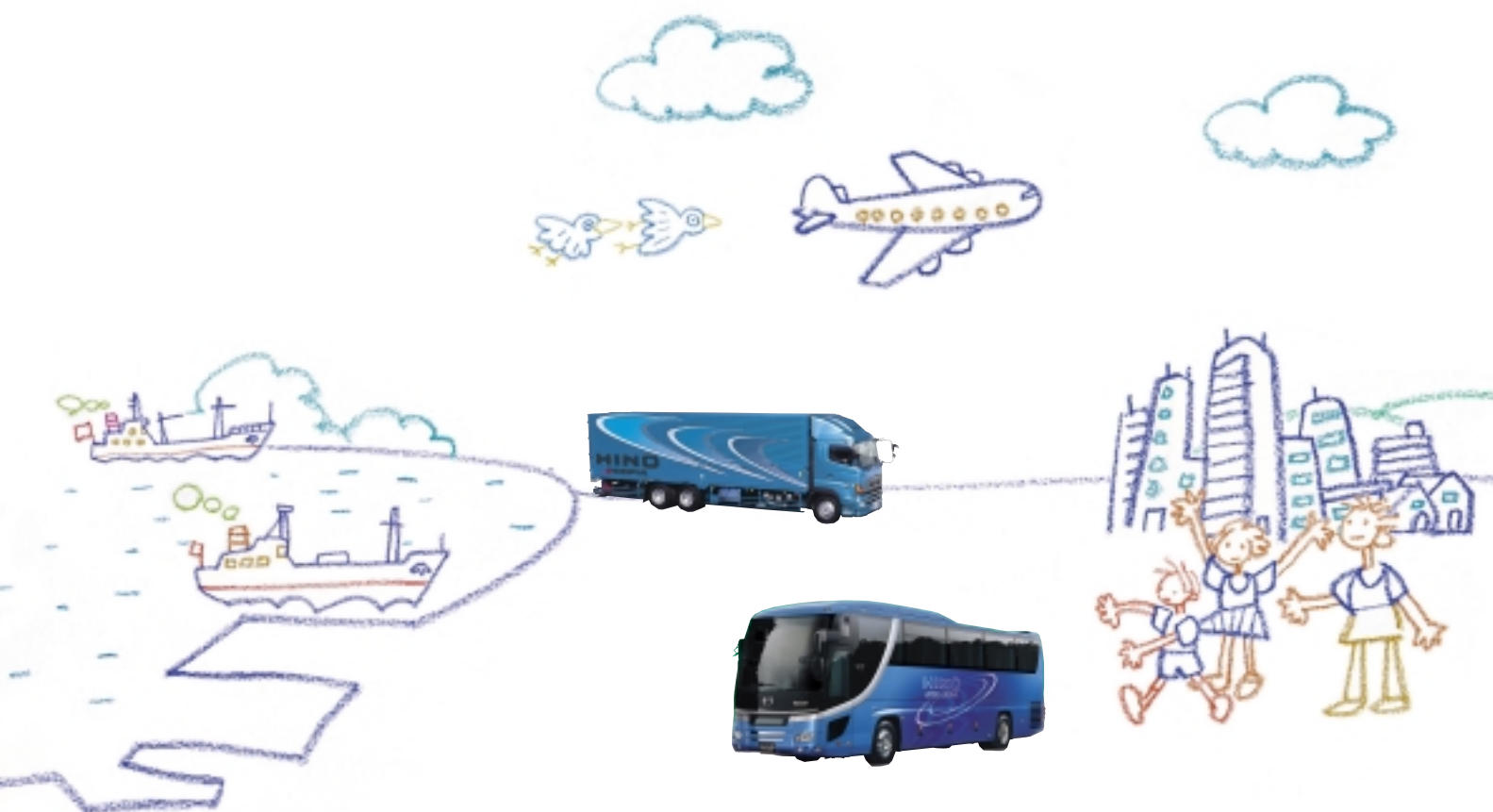




環境・社会報告書 2006

日野自動車株式会社

人、そして物の移動を通じて社会を支える



人や物の移動を通じて、社会の役に立ちたい。 それが私たち日野自動車の姿勢です。

私たちがくらす社会は、さまざまな「働くクルマ」によって支えられています。

日野自動車は、トラック・バスをはじめとした「働くクルマ」の

製造・販売を通じて「物流」や「人の移動」に貢献し、

世界中の人々に「豊かさ」と「幸せ」をお届けしたいと考えています。



【作業専用車】

ダンプカーやショベルカーなどの工事車両、除雪車やごみ収集車などが活躍しています。私たちの生活を陰で支える、重要な役割を担っています。



【バス】

私たち市民の足として活躍しています。子どもや高齢者にやさしいユニバーサルデザインを採用したバスや、環境に配慮したハイブリッドバスなどもあります。

【緊急対策用車両】

消防車などの人命救助・緊急対策用車両が、
日夜、私たちの安全を守っています。



【トラック】

食料や生活用品をはじめ、私たちの生活に欠かせないさまざまな物資を運んでいます。トラックが運ぶ貨物輸送量は年間約59億トン※！ 国内輸送の約90%を占めています。



2002年度。(社)全日本トラック協会ホームページより

よいクルマをつくり、地球や人にやさしい輸送をサポートする。 それが、私たち日野自動車の社会的責任です。

自動車メーカーとして、私たち日野自動車の使命は、
人や物の移動を通じて、人々の本当の豊かさを実現していくこと。
「衣食住に加えて『移動』が備わって初めて、
真に幸福な生活が成り立つ」と語る近藤社長が、
歌手で、日本ユニセフ協会大使としても活躍されている
アグネス・チャンさんと語り合いました。



で進む砂漠化は、そんな議論が無意味に思えるほど深刻です。

近藤：そうですね。世界の四大文明と呼ばれ、かつては栄華を極めた場所も、たった数千年の間に砂漠化が進んでいる。現代文明も、この砂漠化の脅威から逃れることはできないでしょう。私たちは何としても、CO₂の排出量を減らして温暖化を防ぎ、砂漠化を食い止めなければなりません。

その点で重要だと思うのが、日本にある『もったいない』という文化です。日本人が燃費のいいクルマをつくるのがうまいのは、きっとそんな文化があるからなのでしょう。私たちは『環境フロンランナー』として、世界トップクラスの環境性能のトラック・バスを世界中のお客様にお届けすることで、地球環境に貢献していきたいと考えています。

私たちの生活を支えている お客様のお役に立ちたい

近藤：ところで、普段はクルマを運転されますか？ もしかして、トランクにゴルフバッグなんかを積んだりしていませんか？

アグネス：ゴルフバッグはありませんが、プレゼント用に自分が書いた本はたくさん積んでます(笑)。

近藤：それでは燃費が悪いでしょう(笑)。私たち自動車メーカーが、クルマの重量を10kg減らすのにどれだけ苦心しているかご存知ですか？クルマの重量を減らすことも、省燃費につながるのですよ。

アグネス：それは知りませんでした。ほかにも燃費をよくするコツはありますか？

近藤：これはぜひ皆さんにも考えていただきたいことなのですが、運転の仕方によって20～30%も燃費は変わってくるんです。アクセル

社会を支える日野自動車の トラック・バス

近藤社長(以下、近藤)：アグネスさんは世界中を回っていらっしゃいますが、私もこれまでいろいろな場所を訪れました。アフリカでは、『人間は走る動物なんだ』と考えさせられたことがあります。食べるものがない人たちは食料を得るために走っています。ちょっとそこまでと言って、4kmでも5kmでも平気で走っていくのです。

一方、食べるものに困らないごく一部の人はというと、やはり走っている。ダイエットのためなのか、運動不足解消のためなのか。いずれにしろ、飢餓と飽食というアンバランスが、地球上にはたくさん存在しているのだと痛感しました。

アグネス・チャンさん(以下、アグネス)：私は2006年4月、日本ユニセフ協会大使として、南アフリカ共和国の中にあるレソト王国に行ってきました。人口180万人のうち、4人に1人がHIV(エイズ)に感染していると言われるところですよ。私が訪ねた山村では、一番近くのクリニックまで歩いて7時間。もう少し設備の整った病院に行くには2日がかかります。



近藤：バスに乗って病院に行ったり、食料や医療品をトラックで運んだりという、私たちにとって当たり前のことができないのです

ね。人間の生活には「衣食住」が必要と言いますが、幸せに生きていくうえでは、衣食住に加えて『移動する』手段が大切なんです。

アグネス：人間が移動したり、物が届いたりというのは、大きな意味でのコミュニケーション。つまり、「自由」と同じ意味を持っていると思います。

近藤：そう。そこにこそ、トラックやバスをつくる仕事の意義があるのです。そして、アグネスさんの言う「自由」、つまり移動を実現するためには、クルマをつくる私たちの仕事に加えて、もっと広くさまざまな人たちの力が必要です。

アグネス：ボランティア活動をしているのですが、援助物資を積んだトラック1台を動かすことって、とても大変なんです。ロジスティクスを支える人がいなければ、クルマだけあっても動かないんだということがよくわかりました。

地球環境に対して 日野自動車ができること

アグネス：地球規模で進む温暖化など、CO₂の低減も大きなテーマになっていますよね。

近藤：私たち日野自動車は、燃費を向上させ、CO₂の排出量もより減らすよう取り組んでいます。また、粒子状物質(PM)や窒素酸化物(NOx)についても、排出量を大幅に低減した「平成17年(新長期)排出ガス規制」に対応したトラック・バスをいち早く製品化しました。燃費のよさは日野のクルマの大きな特長。でも、排出ガスをきれいにすることと省燃費は、二律背反の難しいテーマなんです。

アグネス：温暖化の直接の原因をCO₂に求めることに反対する人たちがいますが、世界中

ルを踏みすぎない、急加速をしない、ムダな急ブレーキをかけなくていいように先を予測しながら運転する。そういうことで、燃費は大幅に改善します。

アグネス: 20~30%も違うんですか! それほぜひ、みんなでやらないといけませんね。

近藤: そう、それでお客様に省燃費運転を学んでいただける「お客様テクニカルセンター」をつくったんです。私たち日野自動車は、クルマを販売した後も、講習や情報提供を通じてお客様をサポートする活動に力を入れており、同センターでは、安全運転講習などもおこなっています。

アグネス: とてもいいお話だと思います。せっかく燃費のいいトラックやバスをつくられているのだから、ドライバーの皆さんにも地球にやさしい運転をしていただきたいですね。

近藤: お客様をサポートする取り組みと言えば、この冬、お客様である運送会社のトラックに同乗させてもらって、深夜の東名高速を走ってきました。真夜中の東名はトラックだらけ。ドライバーの皆さんは、東京の市場に朝一番に届けるために夜の高速を走るんですね。そして、市場に到着する時間を調整するために、サービスエリアで仮眠をとる。もちろん、燃費や環境のことを考えてエンジンは切ってしまいますから、空調も止まってしまう。寒い車内で毛布を被って震えながら休んでいらっしゃるんですよ。都市のくらしの背景に、そんなご苦労があることはあまり知られていませんよね。

私たちはトラック・バスのグローバルフロントランナーとして、もちろんいいクルマをつくる。さらに、社会を支える私たちのお客様に対して、環境や安全に関するさまざまなサービスを提供していく。そのことで、社会に貢献していきたいと考えています。



Profile

近藤 詔治

日野自動車株式会社 代表取締役社長
1965年トヨタ自動車工業株式会社(現トヨタ自動車株式会社)入社、2003年より日野自動車株式会社取締役副社長、2004年より現職。



Profile

Agnes Chan
アグネス・チャン

アグネス・チャンさん

香港生まれ。1972年に『ひなげしの花』で日本デビュー。1994年、教育学博士号(Ph.D.)取得。1998年、日本ユニセフ協会大使に就任。ほかにエッセイスト、大学教授など、世界を舞台に幅広く活躍中。

■日野自動車株式会社

●資本金

727億円(2006年3月31日現在)

●従業員数

9,507人(2006年3月31日現在)

●製品

トラック・バス、各種特殊自動車、小型商用車、乗用車、各種エンジン

●トラック・バス出荷台数

100,710台

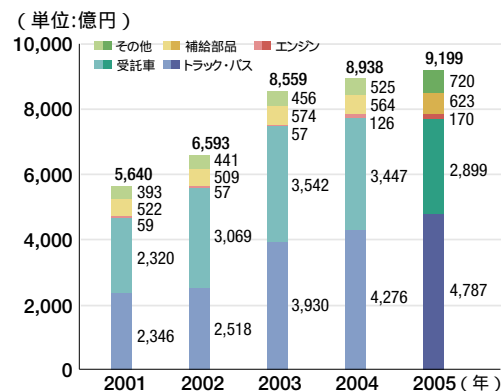
●受託車生産台数

188,779台

●売上高

9,199億円(2005年度)

売上高の推移



■日野自動車の関連企業



■日野自動車の事業所

●本社・日野工場

東京都日野市日野台3丁目1番地1
〒191-8660 TEL.042-586-5111

●羽村工場

東京都羽村市緑ヶ丘3丁目1番地1
〒205-8660 TEL.042-579-0411

●新田工場

群馬県太田市新田早川町10番地1
〒370-0344 TEL.0276-56-5111

●田町事務所

東京都港区芝4丁目11番3号
〒108-0014 TEL.03-3456-8811

●茨城御前山テストコース

茨城県常陸大宮市長倉2023番地
〒311-4613 TEL.0295-55-3122

●北海道芽室テストコース

北海道河西郡芽室町雄馬別14線26番地1
〒082-0382 TEL.0155-66-2511

●日高配車センター

埼玉県日高市上鹿山689番地1
〒350-1234 TEL.0429-85-4747

●青梅部品センター

東京都青梅市末広町1丁目5番1号
〒198-0025 TEL.0428-32-9911

この報告書の作成について

日野自動車は、2000年から発行しておりました環境報告書を昨年より『環境・社会報告書』に変更しました。作成にあたっては、ステークホルダーの皆様との関係を念頭に、「トラック・バスが私たちの生活にどのようにかかわっているか」「日野自動車とはどのような会社なのか」をよりわかりやすくご紹介するよう心がけています。

『環境・社会報告書』として2年目となる今年は、昨年の報告内容を踏まえつつ、トラック・バスに対する社会的要請である「安全・安心」への取り組みを特集にするなど社会に対する取り組みをさらに増やしています。

■ 報告対象範囲

日野自動車の環境保全活動・社会活動の計画・取り組みを基本に、一部のグループ会社の環境保全活動の取り組みについても掲載しています。

■ 報告対象期間

基本的には2005年度(2005年4月～2006年3月)の取り組みを報告していますが、一部では2004年度以前および発行時期までにおこなった取り組みについても報告しています。

また、計画や見通しに基づいた将来予測が含まれておりますが、この将来予測には、既知・未知のリスクや不確定な要素などの要因が含まれており、その要因によって日野自動車とそのグループ会社の実際の成果や実績などは、記載の予測とは大きく異なる可能性があります。

■ 報告書の表記

本報告書は、トラック・バスを使われているお客様をはじめ、荷主や乗客の皆様など、幅広いステークホルダーの皆様にご覧いただけるよう、わかりやすい表記に努めました。

■ 参考としたガイドライン

環境省の「環境報告書ガイドライン(2003年度版)」を参考に作成しました。

皆様の忌憚のないご意見をいただきたく、巻末にアンケート用紙をご用意しています。

本報告書をご覧いただいたご感想、ご意見などをお寄せいただければ幸いです。本報告書は日野自動車のホームページ(<http://www.hino.co.jp/>)にPDF形式で掲載しています。ホームページでは、下記の環境への取り組みについてもご覧いただけます。

- 車種別環境情報
- グリーン購入法適合車種リスト
- 低公害車両のラインナップ
- 環境に関する日野自動車の発表



目次 CONTENTS

日野自動車の事業紹介	1
トップインタビュー	3
会社概要	5

ZOOM UP お客様と社会の「安全と安心」に向けた取り組み	7
--	---

ZOOM UP もっとお客様のために「お役立ち活動」を推進	13
---	----

環境分野での活動	
環境分野での取り組み	15
新長期排出ガス規制適合技術	17
排出ガスの低減	19
燃費性能の向上	21
ハイブリッド車・クリーンエネルギー車の開発	22
3Rの推進と環境負荷物質低減	23
生産活動における環境負荷低減	25
化学物質の管理と低減	26
周辺地域への配慮	27
物流分野での取り組み	28
関連会社の取り組み	29
グローバル企業としての取り組み	30
販売活動での取り組み	31

社会分野での活動	
社会分野での取り組み	33
社会の中で信頼される企業風土づくり	35
安全で働きがいのある職場づくり	36
お客様への取り組み	37
社会とのかかわり	39
地域社会への貢献	41

データ集	
環境保全推進組織	43
2005年度の目標と活動結果	45
日野自動車「2010年 環境取り組みプラン」	47
日野自動車の環境マネジメントシステム	49
日野グループの環境保全活動	50
環境教育とリスク管理	51
環境会計	52
本社・日野工場サイトデータ	53
羽村工場サイトデータ	54
新田工場サイトデータ	55
青梅部品センターサイトデータ	56
日高配車センターサイトデータ	56
田町事務所サイトデータ	56
環境への取り組み経緯	57
編集後記	58

安全のフロンランナーとしての活動の姿勢と具体的な取り組み。

私たちの毎日の生活に必要なものの多くをトラックが運んでいます。

また、地域の移動手段として根づいたバスが、毎日多くのお客様をお乗せしています。

このように、トラック・バスは社会に対して大きな利便性を提供していますが、

一方で、その存在が社会的コスト負担をとまったり道路交通での脅威となっていることを事実として受け止め、事業活動に臨んでいます。

日野自動車では、トラック・バスに対するお客様や社会の最大の要請は、「安全と安心」だと受け止めています。

「安全」への取り組み

交通事故死者数ゼロに向けた国や諸団体の取り組みを踏まえ、日野自動車では、クルマと人と交通環境が三位一体となった、トータルセーフティを基本思想として、「安全」を考えています。

- **クルマ**: 従来からアクティブセーフティ、パッシブセーフティの両面から車両の安全性向上に取り組んできましたが、それに加えて各種交通支援システムと連携した予防安全性の向上、衝突事故そ

のものの低減や追突時の衝撃の軽減などにも取り組んでいます。

- **人**: 商用車の使用実態や商用車がかかる事故の要因分析を踏まえ、自動車運転に携わる人の「認知、判断、対応」の各局面での啓蒙策を盛り込んだ安全運転講習を実施しています。その一環として、実車を使った運転講習会開催のために常設の研修施設を開設しました。
- **交通環境**: 国や諸団体との取り組みへの連携や、ITS^{*1}、AHS^{*2}など各種研究活

動への参画も積極的に実施しています。

- 1 ITS:高度道路交通システム = Intelligent Transport Systems
- 2 AHS:走行支援道路システム = Advanced Cruise-assist Highway Systems



トラックの安全に関する開発の歴史 ★:日本初

衝突安全

被害を低減する
安全装置

大型リアバンパー
トラック後部への衝突時の安全性向上



イージスキャブ
衝突時のドライバー保護



人的ミスの抑止

セーフティアイ
車間距離警報



予防安全

操縦安定性・
運行安定性の向上

ABS
制動時の車輪ロック防止

リターダ
補助ブレーキ: 主ブレーキの負荷を軽減

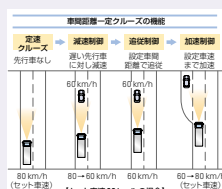


ディスチャージヘッドランプ
低電力ながら明るく、照射範囲もワイドなヘッドランプ



運転者の疲労低減

エアサスカブ
乗り心地を向上した運転席



★スキャンングクルーズ
前方監視をおこない、追突事故の予防などの運転支援

ESスタート
主ブレーキを自動的に保持・解除し坂道発進を補助

プロシフト
低燃費走行を実現し、運転疲労を軽減するセミオートマチックトランスミッション

1990

2000

「安心」への取り組み

お客様の事業活動を支えるトラック・バスは、「安全」であるとともに、「安心」をも目指した取り組みが必要だと日野自動車では考えています。

すなわち、各種安全機能が搭載され整備体制が整っているクルマを保有し、運転するというハード面の「安心」。安全運転技術の向上のための講習会といった運行管理などソフト面の「安心」です。

●ハード面：クルマのアフターサービスに関するもの（予防整備、突発故障への24時間365日対応、整備品質向上など）

●ソフト面：お客様への「お役立ち活動」の各種メニューを揃え、お客様の省燃費運行のためのソフトの提供、危険予知トレーニングの開催、安全運転や省燃費講習会の開催などを幅広く提供し、お客様に活用していただいています。この両面の調和があって初めて、ともに道

路を走る乗用車を利用する方の安心や歩行者の安心、そして移動手段としてバスを利用する方の安心につながると考えています。

これらの活動を通して、お客様や社会の安心の向上に努めてまいります。

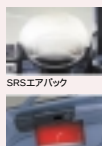


★フロントアンダーランププロテクター

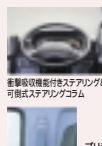
トラックと乗用車の正面衝突時の安全性向上

イージスキャブの進化

衝突時のドライバー保護



ドアインパクトビーム

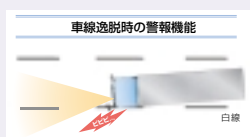


プリテンショナー付き高減速調節式シートベルト



車線逸脱警報装置

脇見、ぼんやり運転などの不安全な運転を警報



★プリクラッシュセーフティシステム(PCS)

衝突の危険を察知し、警報およびシステムが制動をおこない衝突の被害を軽減

→ 詳しくは9ページを参照

商用車
世界初



★左後側方補助カメラ

走行中および発進前の視界補助

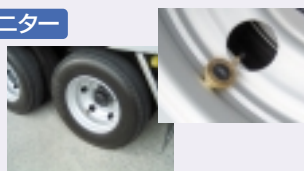
前照灯の地上高低減

★タイヤ空気圧モニター

運転席でタイヤの空気圧を常時確認可能

★ロールスタビリティアシスト

トレーラーの横転抑制



★VSC

車両の横滑り制御

→ 詳しくは10ページを参照

直進安定性向上

ハイファンクションシート

ホールド性向上とリラックス性を追求した、ドライバーズシート

乗り心地向上

トラック・バスの安全性を高めるために、最新の技術を注ぐ姿勢。

安全フロントランナーとして、トラック・バスの安全性向上に力を注ぐ日野自動車。
率先して安全技術の研究を進め、新たな技術を社会に送り出すことで、
商用車がかかわる交通事故を極限まで少なくしていくための努力を続けています。

新たな安全技術を いち早く製品化していく姿勢

現在、わが国の交通事故状況を概観すると、事故件数はほぼ横ばいながら、死亡者数は漸減の方向にあります。しかし、約7,000人に上る交通事故死亡者数のうち、約1/4が商用車関連という残念な状況もあります。

トラックやバスが社会のインフラを支える重要な使命を果たしている以上、新しい安全技術を開発していく努力を惜しまないと

というのが日野自動車の基本的な考えです。私たちの努力によって、新たな安全技術を生み出し、いち早く製品として世に送り出していきたい。そして、日野自動車発の技術で、クルマ社会の安全性向上をリードしていきたいと考えています。

そんな日野自動車から生まれたコンセプトは、キャビンの構造から電子制御機器まで多彩な技術を結集することで、予防安全と衝突安全の総合的な向上を図るCAPS

(キャプス：Collaboration with Active and Passive Safety)。

2005年度に実用化した、商用車としては世界初となる追突被害軽減ブレーキシステム「プリクラッシュセーフティ(PCS)」。

大型トラクターの車両安定性制御技術「VSC (Vehicle Stability Control)」などの開発により、より高い安全性の追求を積極的に推進しています。

追突被害軽減 ブレーキシステム(PCS)

フロントバンパー近くに設置したミリ波レーダーによって、進路上の障害物を検知し、コンピュータが追突の危険があると判断すると、警告音によるドライバーへの注意、自動ブレーキにより、事故の被害を軽減するシステムです。

大型トラック追突事故における死者の内訳 (n=88人)

ケース1 大型トラックが、乗用車に追突した場合



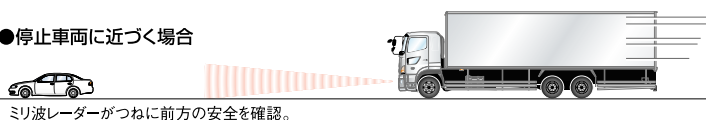
ケース2 大型トラックが、大型トラック・中型トラックに追突した場合



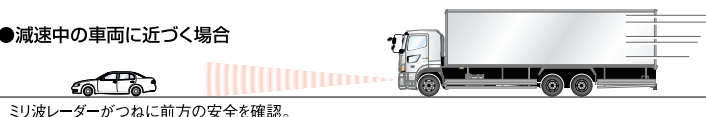
2002年交通事故統計
(財)交通事故総合分析センターの集計結果による

PCSシステム作動例

●停止車両に近づく場合



●減速中の車両に近づく場合



PCSの作動により、追突事故の減少や追突時の衝撃を軽減



技術研究所車両研究室(向かって左から)
グループ長 **秋山 興平**
室長 車両安全担当 **榎本 英彦**
主管 **奥山 宏和**

「安全技術の研究では、事故データの分析や実際に事故を起こした車両の調査が原点です。安全を担当する私たちの役割の大きさを実感するとともに、歩行者や二輪車など、トラック・バスのまわりにいる人たちに対してやさしいクルマを研究したいと考えています」(秋山)

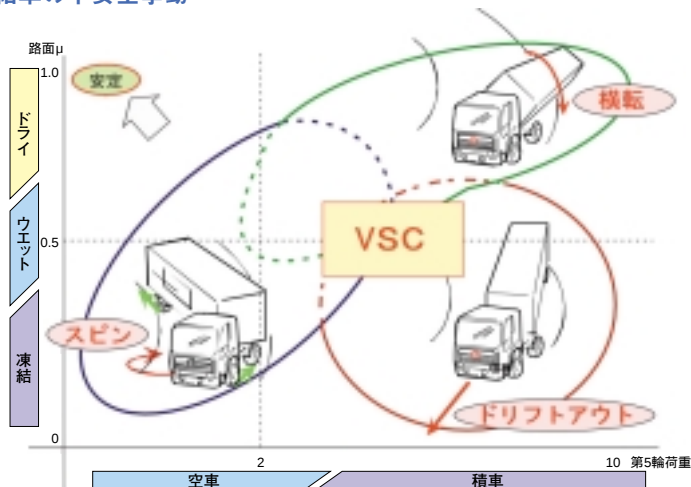
「お客様のニーズ、社会のニーズを的確に捉え、早く具現化することが我々の使命です。そのためには、お客様との密な連携が重要と考えています」(榎本)

「事故の予防や被害の軽減をテーマに研究するなかで、ドライバーの方がいかにクルマの特性を理解してご使用いただくことが大切であるかを痛感しています」(奥山)

大型トラックの 車両安定性制御(VSC)

トレーラーを牽引して大量の物資を運搬する大型トラックは物流の基幹を担う車両です。しかし、積み荷の有無や、路面状況によって、横転など重大な事故を引き起こす危険性をはらんでいました。国内初の横転防止システムに改良を加え、滑りやすい路面での事故も未然に防止するVSCを開発。高い車両制御性能を実現しました。

連結車の不安全挙動



圧雪路でのコーナー進入時



VSC非装着車

VSC装着車

超過速度でのコーナー進入時



VSC非装着車

VSC装着車

VSCの作動により、連結車の単独重大事故の70%を抑止

さらなる安全性の向上を図り、 製品の重点対策分野の選定と研究開発を。

日野自動車では、事故ゼロの安全社会を実現するために

「クルマ・人・交通環境のトータルセーフティ」と「予防安全・衝突安全」の考えのもと、安全技術の開発に取り組んでいます。

国の方策と連携して2010年までに商用車が関与した事故における死者半減を目指します。

製品開発における お客様への責任

日野自動車では、運転者の「疲労低減」、さまざまな事故を想定した「予防安全」「衝突安全」という3つの視点により、これからもトータルセーフティの実現に取り組んでいきます。

Point

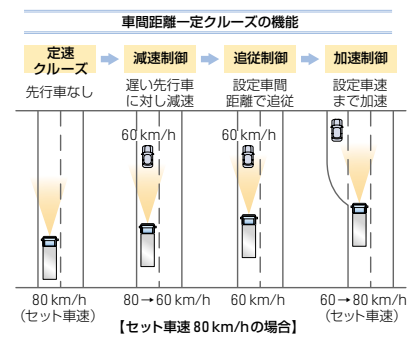
重点対策分野

- 乗用車との正面衝突
(大型トラック)
- 追突事故(大型トラック)
- 交差点での歩行者・自転車との
接触事故(小型トラック)

予防安全……事故を未然に防止する安全技術

● スキャンニングクルーズ

赤外線レーザーレーダーで先行車を監視、先行車との距離が近づくとき車間距離警報が作動し、ドライバーに注意を促します。



● 車線逸脱警報装置

画像センサーにて道路前方の車線(白線)を認識し、脇見や居眠り等による車線逸脱に対し警報を鳴らします。



衝突安全……万一の事故の際に、被害を軽減する安全装置

● イージスキャブ

イージスキャブは高剛性キャブをはじめ、ドアインパクトビーム、SRSエアバッグ、衝撃吸収機能付ステアリング、可倒式ステアリングコラム、プリテンショナー付シートベルトなどの衝突安全性を高める機能を備えたキャブの総称です。



● フロントアンダーランププロテクター

乗用車が大型車に正面衝突した際、大型車の下部に潜り込むことを防止。乗用車側の衝撃吸収機能を有効に働かせ、乗用車側のダメージを軽減します。



予防安全の次世代技術

●ASVコンセプトC（先進都市内集配車）

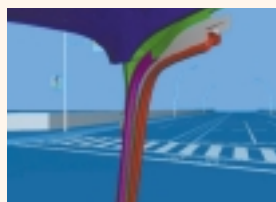
歩行者や自転車との事故防止を第一に考えた都市内集配車のコンセプトモデル。極細ピラーやカメラシステム等による「死角ゼロへのチャレンジ」や、歩行者安全ボデーなど、安全性を多角的に追求するとともに、ドライバーの疲労を軽減するユニバーサルデザインを採用しています。



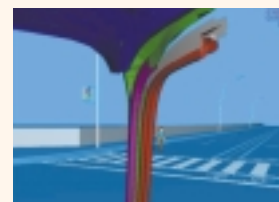
●クリアビューピラー

ドライバーの目線方向でのピラーの太さを極限まで細くして、交差点等の右折の際のボデー構造による視界の妨げを低減、横断歩道上の歩行者等の認知を容易にします。

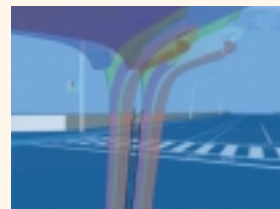
左目線 



右目線 



左右視の
重ね合わせ図

左右視のピラーが重なり合わないため、ピラーが透けて見える

衝突安全の次世代技術

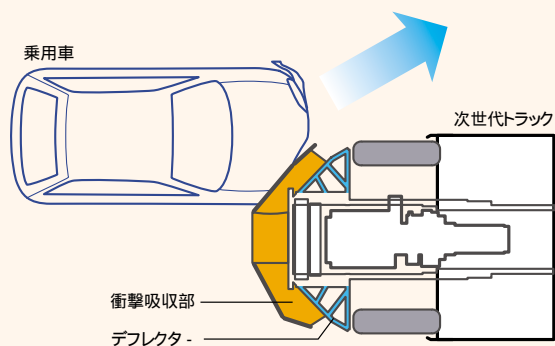
●ASVコンセプトL（先進長距離輸送車）

長距離輸送車の次世代安全技術を提示するコンセプトモデル。ハイウェイなどの高速走行を中心に、事故の未然防止策と万一の衝突時の被害軽減対策を提案。さらに、安全・快適な走行を支援するドライバー向けユニバーサルデザインをキャビンの随所に盛り込んでいます。



●衝撃緩和フロントストラクチャ

乗用車との正面衝突事故の際、乗用車の衝撃吸収機能をフルに引き出しながらトラック側でもエネルギーを吸収、さらに衝突後の乗用車の動きもコントロールして被害を最小限にとどめます。



「点・線」のおつきあいから、「面」のおつきあいへ。 お客様との絆づくりをさらに深めるために。

私たちの直接のお客様である運輸の仕事をする皆様は、
長期間にわたって日野のトラック・バスをご利用されることになります。
将来の規制情報などを見据え、お客様にとってメリットのある最適なクルマをご提供するなど、
販売時点でのサービスに加えて、より一層の安全運転技術の向上と収益向上のために、
さまざまなサービスや情報を提供していきたいと私たちは考えています。

メーカーとして日本初となる 常設のお客様講習施設 「お客様テクニカルセンター」を 開設

環境省の資料によるとCO₂全排出量のおよそ8.2%が貨物自動車によるものです。CO₂以外でも、NOxやPMなどの低減に向けて社会的な関心が高まっています。加えて、軽油価格の高騰、輸送運賃の低迷など、お客様の経営状況からも省燃費運転へのニーズが高まっています。さらに、規制緩和によって経験の浅いドライバーが増加。事故件数が増加し、安全走行の実現も大きな課題となっています。

日野自動車では車両実験用のテストコースを利用して、省燃費運転講習や安全運転講習を実施してきましたが、より多くのお客様のご要望にお応えするために、2005年6月、常設のお客様向け講習施設として羽村工場内に「お客様テクニカルセンター」を開設しました。

お客様テクニカルセンターは、全長1.2kmの周回路をはじめ、安全講習時にコースを設定するデモスペース、研修用のプレゼンテーションルームや環境・安全技術の展示スペースなどを備えたセンターオフィスから構成され、座学から運転実習まで一貫して実施できるようになっています。

スタッフにはこれまで開発系の技術者として環境や安全に携わり、かつ省燃費運転などのスキルも有した社員を結集。省燃費運転や安全運転の要点をお伝えするとともに、最新の技術についても情報を発信しています。



センターオフィス



ディスプレイホール



プレゼンテーションルーム



BR信頼性MB室 室長
兼 お客様センター室 室長
岩井 章

省燃費運転や安全運転に対するお客様のご要望の大きさに、正直驚かされています。開設時の目標として年間で3,000人の受講を目指してきましたが、2006年4月末時点で約3,900人のご利用をいただきました。お客様とご相談しながら、私たちにできることは何でもやろうというスタンスで取り組んでいます。当センターだけでは全国のお客様に十分対応するのは難しい面もあります。今後は、お客様ご自身をインストラクターとして養成するサポートなどさまざまな方策を通して、私たちの活動をさらに広げていきたいと考えています。

省燃費運転講習



ふだんどりの運転で周回路をまず走行。約30分の講習を受けていただき、再度周回路を走行。アクセル開度、ギヤチェンジのタイミング、エンジンプレーキの活用など、基本的な事項を学んでいただくだけで、驚くほどの成果があがります。なかには30%もの燃費向上を体験される方も。運転実習後は省燃費運転による効果が、年間どれだけ

の燃料節約につながるか、またCO₂排出量がどれだけ削減できるかなど総合的な分析データをご提供しています。

安全運転講習

デモスペース内にコースを設定。クランクや縦列駐車、看板などの障害物クリアの講習をおこないます。市街地での配送業務をおこなわれているお客様のご利用が多い講



習ですが、個々のお客様のご要望に合わせて、講習内容、コース設定などをおこなっています。

シミュレーター



衝突安全の分野では、実車による講習は困難なため、急ブレーキ時や横転時のG(加速度)も再現するシミュレーターを利用し、新たな安全技術を体感していただいています。



試乗コース(周回路1.2km)

試乗コースのS字路走行

お客様テクニカルセンター受講者の声(抜粋)

- 省燃費運転の内容、効果がよくわかった。受講者の大部分は省燃費運転講習を受けた経験がなく、とてもよい体験だった。
- 省燃費は、デジタルタコグラフを活用して取り組んでいるが、受講してさらに20%の削減に驚いた。
- ちょっとした心がけひとつで、燃費に差が出るのがよくわかった。
- 省エネ運転の効果(燃費向上率)に驚いた。実体験により、今後の指導に自信がついた。社内への啓蒙活動に活用していく。
- 省エネも大事だが、安全を重視した講習は大変役に立った。この講習を営業所全体に普及させていく。
- 新たな知見を得た。受講したビデオ、マニュアルを社内展開し、乗務員に徹底する。
- シミュレーターの体験で、安全の重要性がわかった。
- 展示で安全に対する日野の姿勢を強く感じた。小型トラックのクリアビュービラーは、導入を検討したい。
- 地方にもこのようなセンターが欲しい。

日野自動車の 環境分野での取り組み

トラック・バスの環境配慮のこと

〈技術開発や製品づくりでの取り組み〉

環境負荷の低減を目指し、排出ガスの低減や燃費を向上させる技術の開発、リサイクルを想定した製品づくりに取り組んでいます。

→ 詳しくは **17～24ページ**を参照

私たちの考え方

トラック・バスは市民の生活を支えると同時に、環境負荷を生じます。だからこそ、環境負荷を低減することが私たちの大きな課題です。

トラック・バスをつくる時のこと

〈生産時と化学物質、物流についての取り組み〉

省エネルギー、水使用量低減、排出物低減、化学物質低減の4つを柱に、環境負荷の低減に向けた長期計画を立て、その達成を目指して改善活動を進めています。

→ 詳しくは **25～28ページ**を参照



トラック・バスという 私たちの製品が持つ環境影響を 開発から廃車に至るすべての段階で 低減していきます

役目を終えたトラック・バスのこと

〈リサイクルに関する取り組み〉

トラック・バスのリサイクルを促進するため、原材料の環境負荷低減を推進しています。

→ 詳しくは23～24ページを参照

一緒に仕事をするパートナー との関係

〈取引先とのかかわり〉

私たちが事業を進めるうえで、多種多様な技術・ノウハウを持った取引先の協力は不可欠。取引先と協力しながら、総合的に環境負荷の低減に取り組んでいます。

→ 詳しくは29～30ページを参照

トラック・バスを売るときのこと

〈販売会社における取り組み〉

販売会社の環境マネジメントシステムを構築して、販売活動の環境マネジメントに積極的に取り組んでいます。

→ 詳しくは31～32ページを参照

私たちは地球規模で進む温暖化・環境汚染の拡大を防止するため、法規制にとらわれず、製品の開発から廃車までのライフサイクル全体で環境負荷の低減を進め、企業理念「豊かで住みよい地球をめざし、新たな価値を創造し続ける」の実現に向けて取り組んでいます。

そして、生活の基盤を支える商用車メーカーとして、環境性能と利便性を兼ね備えた製品を提供することで、商用車の環境フロントランナーであり続けることを目指します。この考えを実現するために、私たちは環境に対する取り組みを5年ごとに見直し、継続的な改善活動を進めています。

2005年末に2010年に向けた第4次環境取り組みプランを公表しました。この取り組みプランは「企業活動全般での環境負荷の低減」「日野グループとしての環境保全活動のさらなる推進」「社会との共存」の3つを柱に、「エネルギー・温暖化対策の推進」「資源循環の推進」「環境負荷物質の使用量低減」「大気環境の保全」「環境経営のさらなる推進」の5項目を目標としています。

これからも私たちは環境フロントランナーの自負のもと、環境保全に積極的に取り組んでいます。



取締役副社長
萩原 文二

新長期排出ガス規制適合技術

VISION

信頼ある従来技術を進化させることで、安心して、長くお使いいただけるシステムを開発しています。

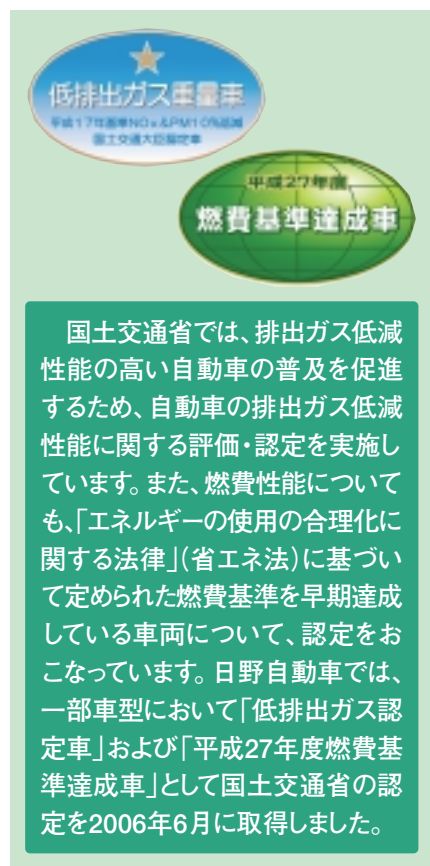
世界一厳しい[※]排出ガス規制である「平成17年(新長期)排出ガス規制」。この高い目標に対し、新短期(平成15・16年)排出ガス規制四ツ星認定を取得したディーゼル低公害システム「DPR」をさらに進化させることでクリア。信頼ある従来技術に基づいているため、燃料も使い方も四ツ星車と同じ。安心して、長くお使いいただけるシステムです。

2006年7月現在

Key Word

**低排出ガス認定
&燃費基準達成**

国が認定する制度



1 コンバインドEGRシステム

日野自動車独自のパルスEGRシステムを進化させ、高効率クールEGRと組み合わせた、世界初の「コンバインドEGR」により、NOxの大幅な低減と良好な燃費の両立を可能としました。

2 ターボインタークーラー

新開発の高効率インタークーラーは、高い出力とトルクを可能とするとともに、大幅な燃費向上を実現しました。

3 コモンレール式燃料噴射システム

新開発のコモンレールシステムはマルチ噴射機能を採用し、噴射量、噴射時期、噴射圧力などをコンピュータが的確に制御することにより、クリーンな燃焼を実現しました。また、マルチ噴射機能を活用し、DPRの強制再生を可能としました。

4 DPRクリーナー

本格的なセラミック製のDPRフィルターを開発し、PMを95%以上低減するとともに、微小粒子の大幅な低減も可能としました。

5 エンジン協調制御システム

各種センサーからの情報をエンジン協調制御コンピュータが、それぞれのシステムにフィードバック。よりきめ細やかに、かつ総合的にコントロールすることでNOx、PM、CO₂を大幅に低減します。

6 アイドルストップシステム

渋滞や信号待ちなど停車時にシフトレバーをニュートラルにすると、自動的にエンジンがストップ。排出ガス、騒音の低減はもちろん、低燃費にも貢献します。

7 エコドライブ支援システム

「日野ドライブマスター」

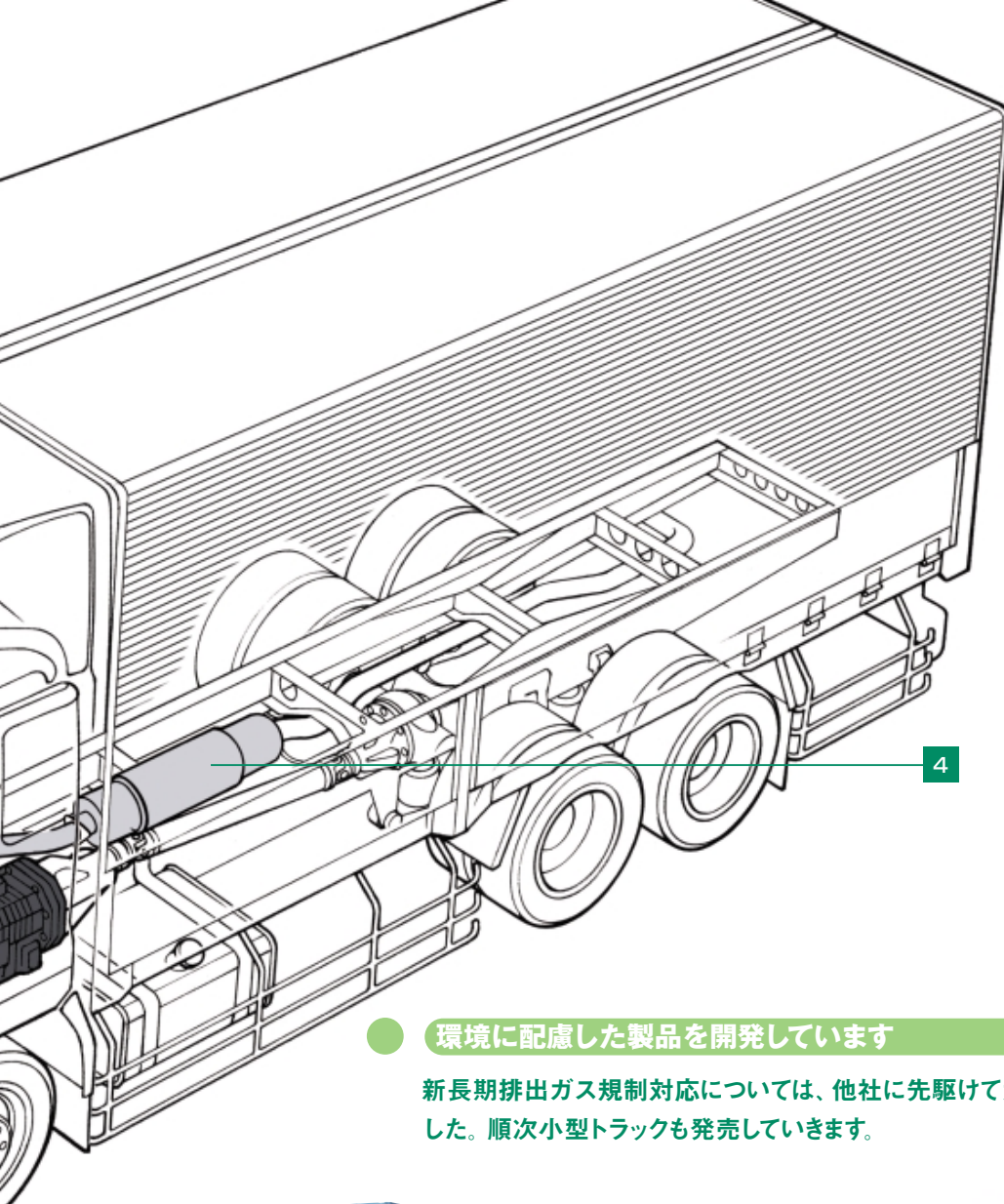
運行管理者が設定した「アクセル開度」「エンジン回転数」「アイドル時間」「車速」の各数値を運転者がオーバーすると警告するほか、運転指導に役立つ各種データの計測と確認ができます。

8 空力特性

空力特性に優れたキャブスタイルが一層の燃費低減を図ります。

9 リサイクル材料

内装樹脂部品にリサイクル性のよい熱可塑性樹脂を採用。フロアマット裏面フェルトやシートクッション、バッテリーカバーにも再生材を積極的に採用しています。



4

新長期マーク



このマークは、最新の排出ガス低減技術を採用している日野自動車の地球にやさしいトラック・バスを表すマークで、「新長期排出ガス規制」に適合する日野自動車のすべての車両に貼付されます。楕円をベースに地球と樹木を配して、環境へのやさしさを表現しています。

環境に配慮した製品を開発しています

新長期排出ガス規制対応については、他社に先駆けて大型トラック「日野プロフィア」を発売しました。順次小型トラックも発売していきます。



大型トラック「日野プロフィア」

13年ぶりにフルモデルチェンジした「日野プロフィア」シリーズは、先進の環境性能と安全性能を採用し、今世紀の物流をリードする大型トラックとして、そのすべてを新規開発し、性能と商品力を大幅に向上させました。



中型トラック「日野レンジャー」

よりクリーンなトラックを目指し、最新鋭の環境性能を備えた日野レンジャー。独創の新システム「DPR」は、排出ガスから煤を大幅に低減。そして、全車新長期排出ガス規制をクリアするなど、21世紀にふさわしい環境性能が一段とレベルアップしました。



小型トラック「日野デュトロ ハイブリッド」

クリーンディーゼルエンジンと、日野が熟成を重ねたハイブリッドシステムとの組み合わせにより、市街地走行ではより効率的な走りを実現しました。また、加速・登坂など負荷が高いときにも、エンジンをアシストするモーターの働きで、排出ガスのクリーン化を同時に実現しました。



ノンステップ大型路線バス 「日野ブルーリボンシティ ハイブリッド」

長年にわたり培ってきたハイブリッドテクノロジーをさらに進化させ、仕様および環境性能を大幅に向上させました。ハイブリッドユニットを小型・軽量化し、設置場所を屋根上に変更することで、フロアをノンステップ化することが可能となりました。

排出ガスの低減

VISION

ディーゼルメーカー「世界ダントツナンバーワン」の低排出ガス性能。

日野自動車は、環境問題を重要課題として取り組み、規制にとらわれず、環境改善に有効な技術は積極的に製品化し、市場に展開していきます。

Key Word

新長期排出
ガス規制適合

世界一厳しい^{*}排出ガス規制

排出ガス規制への対応状況

2003年～2004年にかけて、大型から小型まですべてのトラックでPM (Particulate Matter：粒子状物質)を新長期排出ガス規制並みに低減した、最もクリーンな超低PM排出ガス認定車(四ツ星・DPR付)を発売し好評を得たほか、NOxも新長期排出ガス規制並みに低減したハイブリッド車や、DPNR搭載の小型トラックも発売しました。

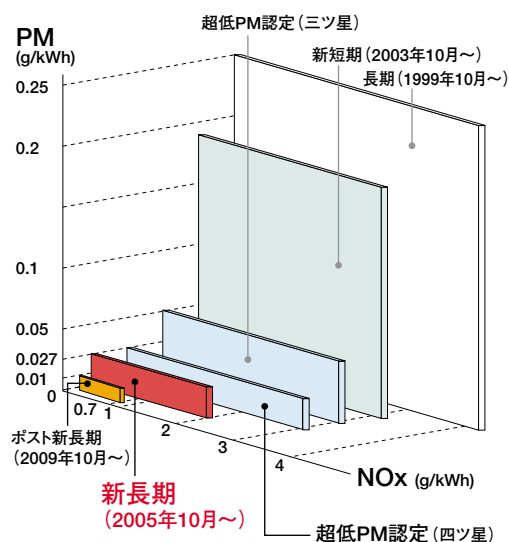
2005年～2006年2月には、新長期排出ガス規制に適合させた中型トラック、大型観光バス、大型トラックを発売。大型トラックの一部車種で新長期排出ガス規制対応の「低排出ガス認定車」として国土交通省の認可を取得しています。また、小型トラックについても順次発売していきます。

バスについては、2004年7月からDPR付の中型・小型バスを販売。大型では、NOxも新長期排出ガス規制に適合させた大型ハイブリッドバスを2005年1月より販売しています。

2009年からは、新長期排出ガス規制よりさらに厳しい規制(ポスト新長期)が制定されることも決定されましたが、これに対してもすでに精力的、積極的に取り組んでいます。

また、国土交通省は、排出ガス量が少ないディーゼル車の開発、普及を促進するため「低排出ガス車認定制度」と「新長期排出ガス規制適合車の税制優遇制度」をおこなっています。これらの認定制度に対しても、上位ランクの認定確保に努めています。

ディーゼル車排出ガス規制の動向 (法規制施行時期)



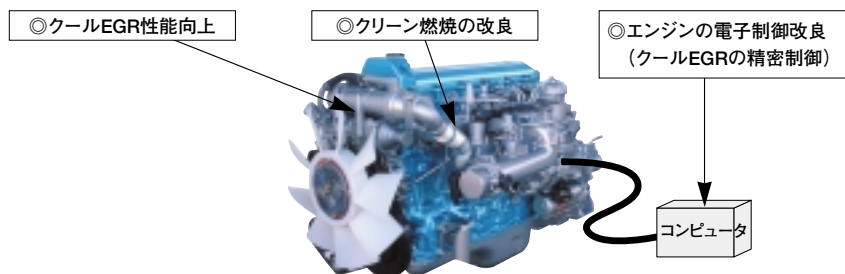
新長期排出ガス規制適合エンジン

世界一厳しい^{*}排出ガス規制である「新長期(平成17年)排出ガス規制」。日野自動車は、この高い目標に対し、新短期(平成15・16年)排出ガス規制四ツ星認定を取得したディーゼル低公害システム「DPR」をさらに進化させることでクリア。その長所は、信頼ある既存技術の延長線上にある点です(右の写真の◎印が四ツ星車からの主な変更内容です)。燃料も使い方も、四ツ星車と同じ。安心して、いつまでもお使いいただけるシステムです。

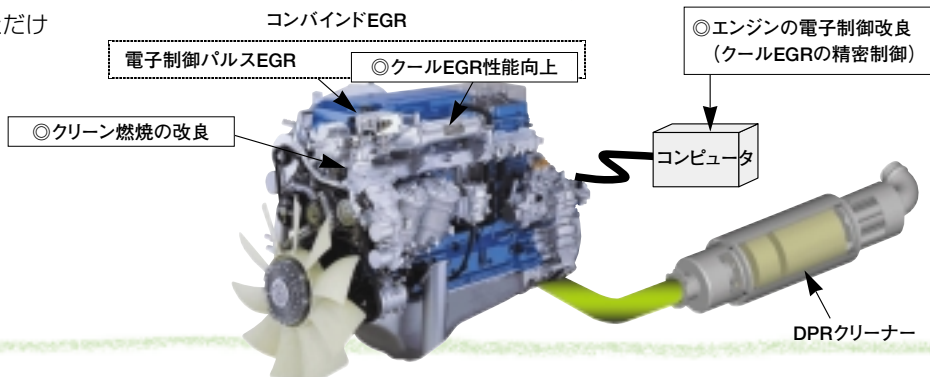
2006年7月現在



新長期排出ガス規制適合の中型J08E型エンジン



新長期排出ガス規制適合の大型E13C型エンジン



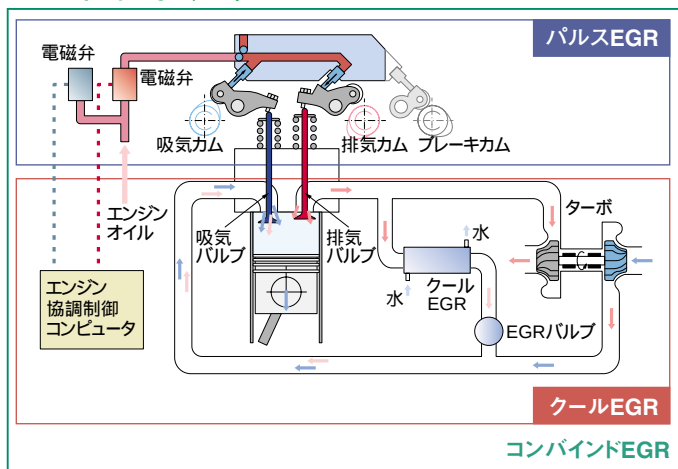
コンバインドEGRシステム

EGR（排出ガス再循環）システムは、排出ガスを燃焼室に再循環させ、燃焼室内空気の酸素濃度を低くし、緩やかな燃焼で燃焼温度を下げて、NOxの低減を図ります。

「日野プロフィア」に採用した世界初の「コンバインドEGRシステム」は、高負荷時には日野独自のパルスEGRを進化させた電子制御パルスEGRを、また、軽負荷時には排出ガスを冷却してシリンダー内に再循環させる高効率クールEGRを適用。冷却水への放熱量増加を抑えながら、かつ燃費悪化をと

もなわずに高負荷域の排出ガス再循環を達成することにより、NOxの大幅低減と良好な燃費の両立を可能としました。

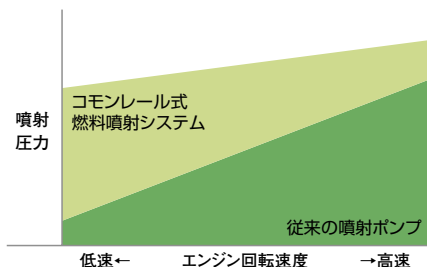
コンバインドEGRシステム



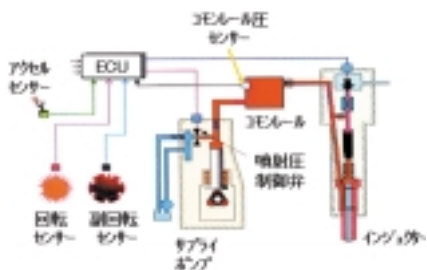
コモンレール式燃料噴射システム

世界で初めて日野自動車が採用した「コモンレール式燃料噴射システム」は、高圧の燃料をコモンレール内に蓄え、電子制御されたインジェクターから各気筒に噴射するというものです。さらに、新開発のコモンレールシステムは、マルチ噴射機能を採用し、燃料の噴射時期、噴射量、噴射圧力などが、エンジンの回転に関係なく最適に制御できます。低回転域から高回転域まで、高圧の燃料噴射が可能となり、クリーンな燃焼を実現しました。

噴射圧力の比較グラフ

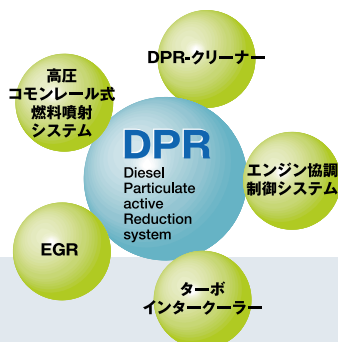


システムイメージ



DPRクリーナー

エンジン排出ガス全量を高耐熱性セラミック壁の微細孔を通してろ過する世界初の本格的セラミックフィルターの採用により、排出ガス中の煤の95%を捕集。新開発のコモンレール式燃料噴射システムのきめ細かい電子制御により、捕集した煤を走行中に燃焼除去します。従来は困難とされていた渋滞をとまなう都市走行など、排気温度が低い状態でも、安定したPM低減性能を発揮します。



エンジンR&D部
エンジン制御・
噴射系設計室
丑久保 聡

コモンレールシステムはディーゼルエンジンに画期的な技術の進歩をもたらし、燃料の噴射を自由に制御できるようになりました。その反面、EGR、ターボなどの排ガスデバイスや車両の安全装置・プロシフトなどの協調制御など、複雑かつ膨大な制御をまとめあげるのに大変苦労しました。

世界で初めてコモンレールシステムを実用化したノウハウとプライドを持って、世界一クリーンな排ガスを目指し、開発に取り組んでいます。

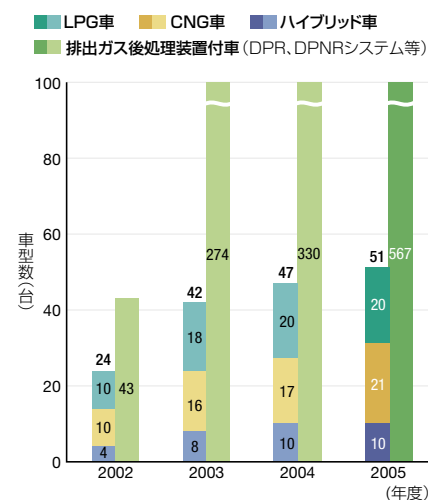
自治体の低公害車指定制度への対応

日野自動車は、関東地区の8都県市が実施している「低公害車指定制度」、関西地域の7府県市が実施している「LEV-7指定制度」に積極的に対応しています。

都市内走行車型を中心に、トラックおよび路線バスなどに、LPG車、CNG車、ハイブリッド車51車型が指定を受けています。DPRシステム搭載車およびDPNRシステム搭載車については、567車型が指定を受けています。

また、2003年10月から1都3県の自治体が定める、PM排出基準を満たさないディーゼル車の運行規制(1都3県内運行禁止)が開始され、2006年4月からは、さらに規制が強化(東京都・埼玉県)されています。日野自動車では、平成6年規制(KC付)車以降の既販売車用PM減少装置として、「PMTラップ」が8都県市の指定を受け、規制に適合しています。

低公害車指定車型数の推移



燃費性能の向上

VISION

さまざまな先端技術を駆使して、
燃費の向上に努めています。

製品開発を通じた省エネルギー施策として、燃費の向上に注力しています。ターボインタークーラーやPro Shift（プロシフト）12段ギヤの開発など、長年の研究に基づく先進の技術力で、CO₂排出量削減に貢献します。

Key Word

直列6気筒
E13C型エンジン

総力を挙げて開発した
新世代ディーゼルエンジン

新世代ディーゼルエンジン E13C型エンジン

日野自動車が環境性能、経済性、動力性のいずれにおいても時代をリードすべく総力を挙げて開発した、新世代ターボインタークーラーエンジン。アイドルレベルの低回転から圧倒的な高トルクを発揮し、1100回転で最大トルクを発生するエンジンに仕上げました。

極めてスムーズな発達性を確保するとともに、高トルクを発揮した粘り強い走りにより、低燃費を実現。プロシフトとの組み合わせは、つねに最適燃焼のグリーンゾーンでの走行を可能とし、抜群の低燃費をもたらします。

日野エコラン

E13C型エンジンに内蔵された省燃費運転支援システム。「日野エコラン」はスイッチひとつでエンジンコンピュータが燃費優良運転者と同様のアクセルワークに修正し、模範的な省燃費走行を実現するシステムです。

空車、積車、登坂などすべての走行条件で運転者のアクセル操作に応じながらも、その加速を省燃費型に制御するので、波状の少ない滑らかな運転が容易となり、燃料の浪費を抑えます。

アイドルストップシステムの 設定車両拡大

東京都をはじめとする各自治体のアイドルリング停止条例などの拡大に対応するため、渋滞や信号待ちなどの停車時に、シフトレバーをニュートラル位置にするだけで、自動的にエンジンを停止できるアイドルストップを設定しています。路線バスのみならず、観光バスや都市内走行の多いトラックにも設定しています。燃費が向上するとともに、排出ガスや騒音も低減します。

Pro Shift（プロシフト）12段

E13C型エンジンの低燃費性能をフルに引き出す、国内初*のフルシンクロ型構造のPro Shift 12段セミオートマチックトランスミッションを新開発しました。

発進から高速巡航まで幅広いギヤレンジがカバーします。つねに燃費のよいグリーンゾーン内での確・スムーズな自動変速をおこない、イーゼードライブと省燃費走行を両立させます。これにより、運転疲労の軽減に加え、動力性能の向上も実現しました。



大型トラッククラス Pro Shift（プロシフト）12段

空力特性

低燃費車には、エンジン部分以外での技術開発も不可欠です。空気抵抗低減のためのボディスタイル改善、エアロバンパーやウインドデフレクターの装着、車両の軽量化、パワーラインシリーズの適正化などを図り、低燃費車の開発を進めています。

「日野プロフィア」には、世界トップレベルの空力性能を追究して生まれた「グランドエアロテック・デザイン」のキャブが採用されています。



低燃費を図るキャブスタイル



E13C型エンジン



製品開発部
大型トラック（国内）
グループ CE
（元技術研究所車両研究室）

北沢 啓一

技術研究所
車両研究室
パワートレインシステム
グループ

安井 博文

燃費を悪くする「波状運転（むやみに加減速を繰り返す運転）」や「急加速」を車両側で防止できないか？ AMT車に限らずマニュアル車でも、経験豊富な省燃費運転指導員を乗せているようなシステムを目指して、新プロフィアのエコラン開発に取り組みました。ロジック作成、シミュレーション確認、実車走行実験と、データ分析の繰り返しで、ときには深夜に自らハンドルを握り、試運転をおこなうこともありました。その結果、アクセルレスポンスを損なうことなく、車両の加速を省燃費型に安定化させる、まったく新しい日野オリジナルのエコランシステムの開発に成功しました。このシステムにより実際に燃費が改善され、お客様が喜んでくださったときは、本当にうれしいです。従来の燃費向上技術に加え、「車が最適な走り方に知能を持つ」ことが新たな技術開発分野。さらに次のモデルでは、「高知能なエコランシステム」を目指しています。

ハイブリッド車・クリーンエネルギー車の開発

VISION

日野自動車は環境との共生を目指し、ハイブリッド車・クリーンエネルギー車の開発に取り組んでいます。

ハイブリッド車やクリーンエネルギー車(LPG車、CNG車)など、環境負荷の低い車の開発に積極的に取り組んでいます。これらの車両には、グリーン購入法に適合しているものもあり、インフラ整備を含めて、積極的に展開していきます。

Key Word

7車種

グリーン購入法適合車種
(2006年3月現在)

ハイブリッド車

日野自動車は、世界で初めてディーゼル・電気ハイブリッドバスの量産化に成功し、ラインナップも中型トラック、小型トラックを揃え、商用ハイブリッド車の分野をリードしています。

現在、販売している大型路線ハイブリッドバスは、NOx・PMとも新長期排出ガス規制をクリアし、燃費は約15%向上しています。中型・小型トラックは、ともにNOxが新短期排出ガス規制-50%をクリアし、新長期排出ガス規制適合可能レベルを達成。PMも新短期排出ガス規制-85%をクリアしています。燃費は中型トラックで約20%、小型トラックでは約30%向上。こうした高い環境性能は、燃費の向上とともにCO₂の削減にも寄与しています。

また、2005年度の日野製ハイブリッド車両の登録台数は、大型路線バス34台、大型観光バス3台、中型トラック161台、小型トラック1022台で、ハイブリッド車のシェアはダントツです。

今後も、社会のニーズに合った、低公害、低燃費のハイブリッド商用車を開発していきます。



小型トラック「日野デュトロハイブリッド」

LPG (液化石油ガス)車、CNG (圧縮天然ガス)車

LPG車、CNG車はNOx、PM、黒煙の排出量が少なく、低騒音などの優れた特性を備えています。日野自動車では、小型トラック「日野デュトロ」にはLPG、CNG仕様車、中型トラック「日野レンジャー」、「大・中型路線バス」にCNG仕様車を設定しています。

LPG車、CNG車は燃料がガスのため、大きなタンク容量が必要となり、航続距離が十分とれないなどの問題があります。今後は、燃料供給などのインフラの整備状況を勘案し、都市内走行車型を中心に車型シリーズへの展開を検討していきます。

活動事例

CNGエコ・ステーション

日野自動車は、本社・日野工場に隣接して、CNG燃料供給施設「日野自動車エコ・ステーション」を開設しています。一般車両を含めて、CNG燃料の供給サービスを実施しており、東京都心部に比べて充電設備の少ない東京西部地域で、CNG車の普及に貢献しています。

グリーン購入法適合車種

2001年4月に制定されたグリーン購入法に対応し、適合車種を開発。現在、下記の7車種が適合しています(2006年3月現在)。

- 小型トラック「日野デュトロCNG」5車型
- 中型トラック「日野レンジャーCNG」8車型
- 中型路線バス「日野レインボーⅡCNG」1車型

その他の次世代燃料の研究

日野自動車は、次世代燃料の研究にも積極的に取り組んでいます。具体的には、黒煙やPMをほとんど排出しないDME(ジメチルエーテル)を燃料としたエンジンを研究中です。

また、トヨタ自動車と共同で、高圧水素を燃料とする燃料電池ハイブリッドシステム搭載の大型バスの開発を進めてきました。2005年3月に開催された「愛・地球博」では、長久手・瀬戸の会場間を結び足として8台が稼働。走行距離は124,500kmにものぼり、100万人を超えるお客様にご乗車いただきました。

2006年7月からは、中部国際空港に乗り入れる路線バスとして運行を開始する予定です。



燃料電池ハイブリッドバス

- 小型トラック「日野デュトロ ハイブリッド」4車型
- 中型トラック「日野レンジャー ハイブリッド」3車型
- 大型観光バス「日野セレガR ハイブリッド」1車型
- 大型路線バス「日野ブルーリボンシティ ハイブリッド」2車型

車両詳細仕様は、ホームページをご覧ください。
<http://www.hino.co.jp/>

3Rの推進と環境負荷物質低減

VISION

3Rを視野に入れ、資源の有効活用と環境負荷の低減など環境配慮設計を推進しています。

限られた資源を有効活用し、また環境負荷を最少にするために、日野自動車は設計から廃棄に至るまで、3R^{*1}および環境負荷物質の使用量低減などに取り組んでいます。

Key Word

0%

2007年環境負荷物質（鉛、水銀、カドミウム、六価クロム）使用量目標（除外部品除く）

1 リデュース（廃棄物発生抑制・減量化） リユース（再使用） リサイクル（再資源化）

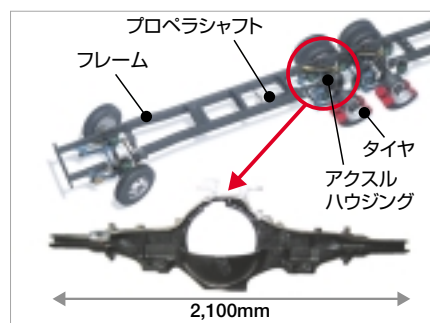
3Rを考慮した設計

設計段階でリサイクル性、廃棄物の発生抑制・減量化、製品・部品の再利用を網羅した設計ガイドラインを制定し、環境に優れた製品づくりに反映させています。

●製品資源の減量化

世界で初めて鋳造同時接合技術を強度部に適用することに成功し、大型トラック用アクスルハウジングの材料を鋳鋼からFCD（球状黒鉛鋳鉄）に置換することができました。

その結果、部品重量は152kgから140kgに低減され、製造工程ではCO₂排出量を25%低減することができ、素材使用量低減や環境負荷低減など多くの効果をもたらしました。



鋳造同時接合によるFCDアクスルハウジング

●リサイクルしやすい材料の採用

リサイクル性向上のため、熱硬化性樹脂材・ゴム材をリサイクル性のよい熱可塑性樹脂材に切り替え、ドアトリムやインパネの基材は、リサイクル性のよいTSOP（Toyota Super Olefin Polymer）を採用しています。コンソールボックスなどの内装樹脂部品やバンパーグリルは、新開発の高光沢AES（樹脂材）に切り替えて無塗装化しています。

●リサイクル材料の適用拡大

フロアマットの裏面フェルトに再生フェルトを採用したほか、シートクッションの一部には再生ウレタン、バッテリーカバーには樹脂バンパーのリサイクル材を使用し、リサイクル材料の適用を拡大しています。

●解体性の向上

大型トラック「日野プロフィア」ではワイヤーハーネスを固定する金属クリップの点数を減少させ、樹脂化することにより解体性を向上させ、銅資源回収作業性の向上を図りました。

環境負荷物質低減の取り組み

日野自動車は環境負荷の低減に対し、自主目標を設定し、取り組んでいます。2006年より、国内生産車において環境負荷4物質（鉛、水銀、カドミウム、六価クロム）の使用を廃止（一部の除外部品を除く）し、2007年完了を目指しています。

鉛使用量の低減活動は、新型車の鉛使用量（バッテリーは除く）の自主目標を、1996年の1/2以下（2001年）および1/4以下（2006年）と段階的に定め、実施してきました。

大型トラック「日野プロフィア」では、銅ラジエーター、銅ヒーターコアのアルミ化に加え、バッテリーハーネス端子の鉛フリー化などをおこない、1996年の1/3以下を達成しています。また、水銀はナビゲーションなどの液晶ディスプレイや室内蛍光灯など、交通安全の観点で使用するもの以外の使用は禁止します。カドミウムは2007年1月以降、六価クロムは2008年1月以降の使用を禁止していきます。

車室内VOC低減の取り組み

車室内VOC^{*2}の低減に対して自主目標を設定し、取り組んでいます。部品メーカーや素材メーカーの協力を得ながら、揮発する化学物質の使用量を抑えた製品づくりを進めています。

2 車室内から発生する揮発性有機化合物（volatile organic compounds）

架装物のリサイクル・適正処理の推進

商用車の特徴として、架装物があります。トラックは大きく分けて、キャブ、シャシおよび架装物の3つに解体され、その内最も処理が困難なのは、廃棄物発生量の多い架装物です。平ボディ、バンボディなど多くの架装物は「キャブ付シャシ部分と解体される時期や解体場所が異なる」「再使用・再利用の割合が高い」などの理由で自動車リサイクル法の対象外となったため、自主的にリサイクルに取り組んでいます。

また、業界全体として効果的な取り組みとするため、日本自動車工業会、日本自動車車体工業会は2002年に「商用車架装物リサイクルに関する自主取り組み」をつくり、公表しました。実際に処理をされる解体業者団体とも情報交換をおこない、リサイクルの促進を図るとともに、円滑に処理できる仕組み（協力事業者制度）づくりも進めています。



架装物処理時の注意事項を紹介したチラシ（日本自動車工業会、日本自動車車体工業会の共同制作）

自動車リサイクル法

「使用済自動車の再資源化等に関する法律(自動車リサイクル法)」が2002年7月に制定され、2005年1月に本格施行されました。この法律は使用済み自動車のリサイクル、適正処理を図るため、自動車メーカーが軸となり関係者に適切な役割分担を義務付けた法律です。

自社が製造した自動車を使用済みとなった場合、その自動車から発生するフロン類、エアバッグ類およびシュレッダーダストを引き取って再資源化をおこないます。

とくに商用車(GVW^{※3}3.5t超のトラック、10人乗り以上のバス)まで含めた法律は世界初です。

3車両総重量

自動車リサイクル法への対応

自動車リサイクル法を遵守し、適正処理・リサイクルを積極的に推進しています。2005年1月1日の施行より、システムなどの問題もなく順調に運営されています。

日野自動車の2005年度の実績は、シュレッダーダスト6,359台(引取量:2181.5t)、エアバッグ類116台、フロン類1,931台(同:938.1kg)となりました。また、再資源化率はシュレッダーダスト48%(法定基準:30%以上)、エアバッグ類94%(同:85%以上)と、いずれも法定基準を達成しています。

●リサイクル料金の算出

3品目(フロン類、エアバッグ類、シュレッダーダスト)のリサイクルに必要な費用は、リサイクル料金としてお客様にご負担いただいています。

また、(財)自動車リサイクル促進センターと当社とを結び料金照会窓口を設け、お客様の料金のお問い合わせに随時・迅速に対応しています。

●3品目の処理

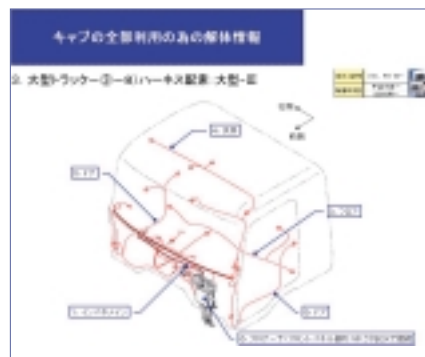
法律に基づき3品目をメーカーが引き取り、リサイクルしています。フロン類、エアバッグ類はメーカー共通の引き取り窓口となる有限責任中間法人自動車再資源化協力機構に業務を委託しています。シュレッダーダストについては、トヨタ、ダイハツ、ホンダなどと共同で設立した豊通リサイクル株式会社ASR再資源化事業部の協力のもと、低コストで効率的なリサイクルを推進しています。

また、廃車をシュレッダーせずに鉄鋼原料

として活用し、シュレッダーダストを発生させない全部再資源化処理を推進しています。再資源化の障害となる銅部品の除去については、解体実験をおこない、除去方法などを示した解体マニュアルを作成し、関連業者に配付しました。



解体実験



解体マニュアル

●エアバッグ類処理マニュアル作成

エアバッグ類の適正かつ効率的なリサイクルのため、回収処理および車上作動処理の方法を解説した適正処理マニュアルを作成しています。

2005年度は、新たにエアバッグを搭載した新型セレガの情報を加えて2006年版マニュアルを作成し、関係事業者へ配付しました。

エアコン用冷媒の低減

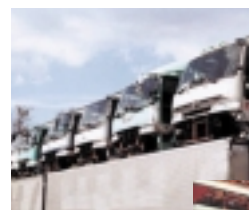
地球温暖化に影響のあるカーエアコン用冷媒HFC134aの使用量低減に取り組んでいます。自主目標の1995年比20%減に対し、大型トラック「日野プロフィア」では42%減、中型トラック「日野レンジャー」では44%減と、大幅な低減を達成しています。

リサイクル率向上の対応

リサイクル可能率については、キャブ付きシャシ状態で自主目標の90%以上を達成しています。今後も、一層のリサイクル率向上に向け、取り組んでいきます。

日野ユートラックによるリユース

中古車および中古部品のリユース、リサイクルを促進するため、日野自動車100%出資の日野中販株式会社と、シー・アール・シー株式会社を合併し、2003年に日野ユートラック株式会社を設立しました。日野グループ全体として製品のリユース、リサイクル向上に努めています。



販売用の中古部品



生産活動における環境負荷低減

VISION

自動車そのものの環境負荷を下げるだけでなく、生産段階での環境負荷低減も大きなテーマです。

日野自動車では、ボランタリープランにおいて具体的な低減目標を掲げ、細かな施策の積み重ねで、生産活動における環境負荷の低減に取り組んでいます。2005年度は、CO₂排出量・水使用量・廃棄物ともに目標を達成しました。

Key Word

19%低減

2005年度のCO₂原単位
(2000年度比)

地球温暖化防止

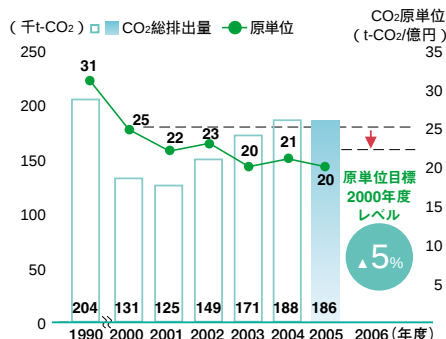
売上高あたりのCO₂排出量を2005年度末までに2000年度比5%低減とすることを目標に、エネルギー低減に取り組みました。

2005年度は、既存ボイラーの更新(小型ボイラー化による稼働台数抑制)や、ハイラックスの生産打ち切りを受けてのライン統合廃合によるエネルギー低減などを実施し、2000年度比19.3%の低減を達成することができました。

また、2005年3月に東京都環境確保条例が改正され、2005年4月より新しい「地球温暖化対策計画書」制度がスタートしたことを受け、対象となる日野工場と羽村工場について、2005年12月に届出書類を正式に提出しました。東京都からの評価結果は、日野工場A+、羽村工場A+となっています。

今後は、AAAを狙うべく、さらなる低減計画を追加する予定です。

CO₂総排出量・原単位の推移

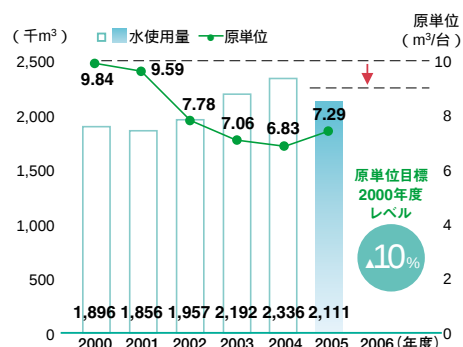


水資源の節約

製品1台あたりの水使用量を、2005年度までに2000年度比10%低減とすることを目標に、節水活動に取り組んできました。

2005年度は、パトロールによる漏洩防止、オーバーフローの撲滅や放流水のろ過再利用などの対策を実施し、製品1台あたりの水使用量を2000年度比25.9%低減しました。

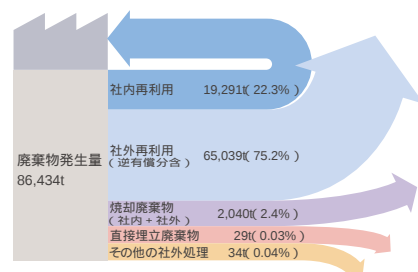
水使用量の推移



廃棄物低減

日野自動車は、廃棄物低減についてボランタリープランで低減目標を定め、資源のリサイクル活動やムダをなくす省資源化活動等、目標達成に向けた取り組みをおこなっています。

2005年度廃棄物処理状況の内訳



●直接埋立廃棄物

2000年度に直接埋立廃棄物ゼロ^{※1}を全工場で達成しました。現在はさらなる直接埋立廃棄物の低減に取り組んでいます。

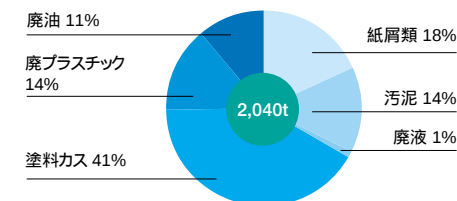
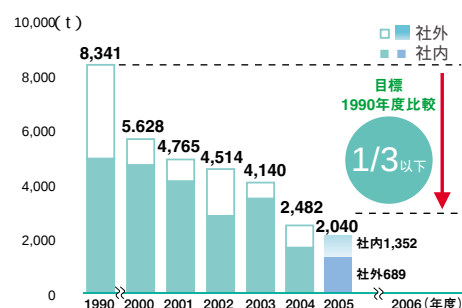
1 直接埋立廃棄物ゼロ: 1995年度比5%未満

●焼却廃棄物

工場から発生する焼却廃棄物を、2005年度までに1990年度比1/3(33%)以下に低減する目標を定め、活動を推進してきましたが、2004年度には早くも目標を達成することができました。

2005年度は、塗料カスの脱水減量化などにより、さらなる発生量の低減に努めたほか、自社焼却炉で発生する熱を利用して蒸気を生成し、工場へ還元するサーマルリサイクルもおこなっています。

焼却廃棄物量と2005年度の内訳



化学物質の管理と低減

VISION

化学物質評価システムを構築・運用して、
環境負荷物質の低減および環境汚染の防止に努めています。

工場内で使う化学物質は、事前にその成分を把握し、使用の可否判断をしています。
また、適正な運用と総量の低減に努めています。

Key Word

44%低減

2005年度の
PRTR対象物質排出量
(1998年度比)

化学物質管理

自動車の生産においては、多くの化学物質を使用します。日野自動車では、PRTR法^{※2}を遵守するとともに、新しい副資材を購入する際、含有する化学物質を事前に確認し、環境面・安全衛生面から高有害性物質の使用を未然に防止する化学物質評価システムを運用しています。

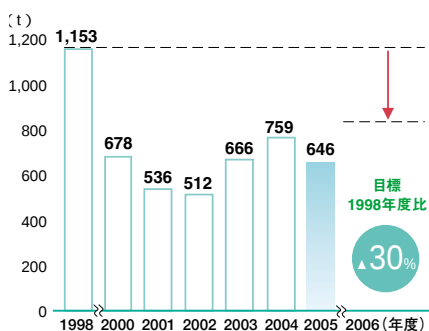
●PRTR法対象物質の低減

2005年度に、自動車生産において使用したPRTR法対象物質は、21物質で約2,600tとなりました。そのうち、24%が大気と水域への排出となります。

2005年度の排出量は646t。1998年度比(集計初年度)で44%低減しました。ボランティアプラン目標の30%低減も大幅達成しました。

2 PRTR Pollutant Release and Transfer Register 法
特定物質の環境への排出量把握および管理の改善促進に関する法律

PRTR法対象物質の排出量の推移



環境負荷物質の低減

大気汚染防止法が改正され、VOC (揮発性有機化合物) 規制が施行(2006年4月)されましたが、日野自動車では、ボランティアプランを設定して、以前から、VOC低減に取り組んでいます。また、焼却炉から発生するダイオキシンについては、焼却炉の厳正管理により、規制値を十分クリアしています。

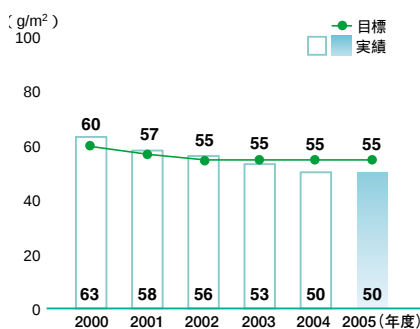
●VOCの低減

羽村工場では、ボディ塗装工程から排出されるVOCについて自主目標を設定して、低減活動を推進しています。

2005年度は、色替え時に使用する洗浄シンナーを減らすためにバブリング洗浄装置を設置し、トライ・調整をおこないました。低減実績を確認し、他ラインにも展開していきます。

なお、2006年4月から施行されたVOC規制に対応して、既設塗装ブース8施設の設置届出を官公庁へ提出しました。

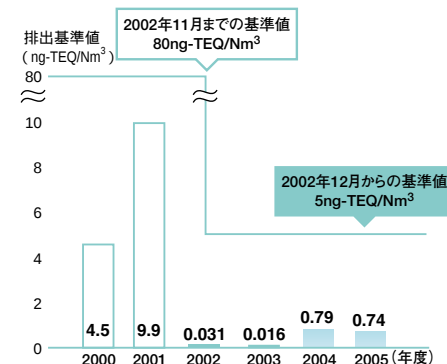
VOC排出量の推移(羽村工場)



●ダイオキシンの低減

日野自動車羽村クリーンセンターでは、各事業所で発生した廃棄物を処理する焼却炉を稼働させています。2002年12月の法改正により強化された規制をすべて遵守しており、排ガス中ダイオキシン濃度は、「ゴミを完全燃焼させる運転管理」、「施設機能の整備と管理の徹底」、「ゴミの分別強化と適正な焼却量の見直し」等の対策を実施した結果、0.74ng-TEQ/Nm³以下となり、新基準値である5ng-TEQ/Nm³を十分クリアしています。

ダイオキシン濃度の推移



●PCB(ポリ塩化ビフェニル)の保管

PCBを含むトランス、コンデンサ等の電気機器を適正に管理、保管しています。

2005年度末での使用済みPCB含有機器の保管台数は225台^{※3}となっています。なお、2005年10月より東京都内でPCB機器処理事業所が稼働したため、これらの機器を処理するために事前登録を実施しました。

3 日野工場: 142台(参考: 現在工場で使用しているPCB含有機器は25台)

羽村工場: 83台(参考: 現在工場で使用しているPCB含有機器は0台)

周辺地域への配慮

VISION

日野自動車では、周辺地域への環境影響に配慮し、環境リスク低減に努めます。

土壌汚染の未然防止活動を徹底しています。また、工場周辺地域への環境配慮をおこない、騒音・振動・臭気などの防止の取り組みを推進しています。

Key Word

未然防止

環境リスクへの取り組み姿勢

土壌汚染未然防止の取り組み

日野自動車では環境リスクの低減のために、地下ピットや貯留槽からの油の漏洩による土壌汚染の未然防止活動を進めています。

日野自動車で設置している全140カ所の地下ピットや貯留槽の点検を終了し、リスクの洗い出しをおこない、順次更新を進めて

います。

具体的な対策として、設備からの油漏れ防止をおこない、地下ピットや貯留槽については樹脂コーティングによる二重化漏洩対策を徹底し、土壌汚染の未然防止対策を推進しています。

騒音・振動防止

工場周辺地域への影響を少なくするため、プレス、コンプレッサー、送風機などの騒音・振動発生源については、低騒音・振動機器の導入、防振基礎、防音壁の設置、設備配置の工夫などをおこなっています。

新規設備導入時には、環境影響の事前チェック・シミュレーション予測などをおこない、適切な対策を実施しています。

土壌・地下水への取り組み

本社・日野工場敷地内の1カ所でトリクロロエチレンが環境基準値を上回るレベルであることが確認され、1997年以降、土壌・地下水の浄化対策を進めています。

工場敷地外への流出防止を最優先と考え、バリア井戸を設置し、定期的な地下水質の測定を実施しています。

それらの測定結果と浄化対策などについて行政に報告するとともに、地域の方々に対して適切な説明を実施しています。

2005年度トリクロロエチレン測定値

環境基準値:0.03[単位:mg/ℓ]	
工場・事務所	水質レベル
本社・日野工場	0.002~0.31
羽村工場	0.002~0.028 ^{※1}
新田工場	検出なし

・測定ポイントは各工場に複数あるため、レベルに幅があります。

・測定日(本社・日野工場:2006年2月/羽村工場:2005年9月)

1 敷地外からの流入によるもの

臭気の低減

臭気発生源である casting 工程については薬液洗浄方式、塗装工程については触媒燃焼方式による脱臭装置を導入し、臭気の低減に努めています。

また、日常管理面として、工場周辺の環境パトロールによる臭気のモニタリングや、敷地境界および発生源における臭気測定などをおこなっています。

Column

エコファクトリー活動の推進

エコファクトリー活動とは、国内外の新規プロジェクトに対し、環境対応項目として「遵法100%」「未然防止」「環境パフォーマンスの向上」を柱に、その環境対策を「企画段階から確実に織り込む」活動として2005年度より始めました。

トライ～操業時期には、環境対策設備が計画通り設置されているか現地現物で社内監査をおこない、後追いの環境対応がおこらないようにすることも狙いのひとつです。

今後、この活動を環境対応項目を確実に織り込む仕組みとして定着させ、環境配慮設計の充実した工場建設を推進していきます。



物流分野での取り組み

VISION

物流改善による効率化、梱包・包装資材の低減により、
物流で発生するCO₂を低減し、資源の有効利用に努めます。

物流改善会議を活動母体として調達・工場間部品輸送改善、完成車輸送・海外生産用部品物流、さらに海外工場の物流費用低減改善を推進することにより、CO₂の排出量の低減を図るとともに梱包・包装資材使用量の低減などを推進しています。

Key Word

物流の効率化

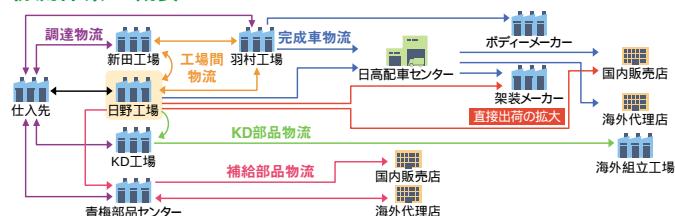
CO₂排出量の低減、
梱包・包装資材使用量の低減

国内物流体系

完成車物流	完成車を工場から国内販売会社および海外代理店へ輸送する物流	工場間物流	日野・羽村・新田工場間および協力工場への部品供給のための物流
KD^{※2}部品物流	車両組立のための部品を海外現地工場へ供給する物流	補給部品物流	国内外の販売店にサービス部品を供給する物流

そのほか仕入先から各工場への部品納入のための調達物流があります。

物流体系の概要



2 KD.....ノックダウン

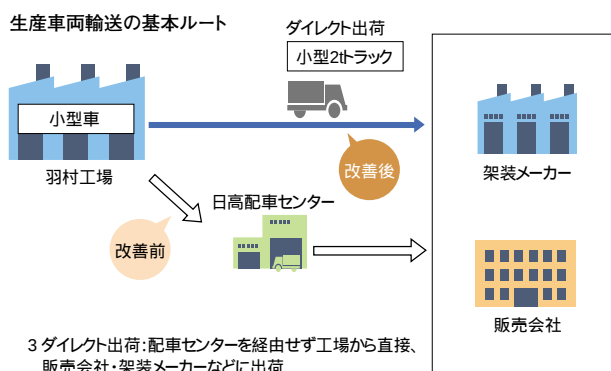
国内物流の改善

国内物流においては、充てん率および積載率の向上、ルートの特短縮、輸送手段のモーダルシフトを主に改善してきました。

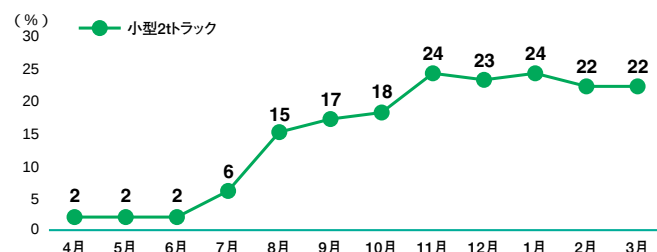
これらの取り組みによる物流の効率向上は、CO₂の低減に貢献しています。

改善事例

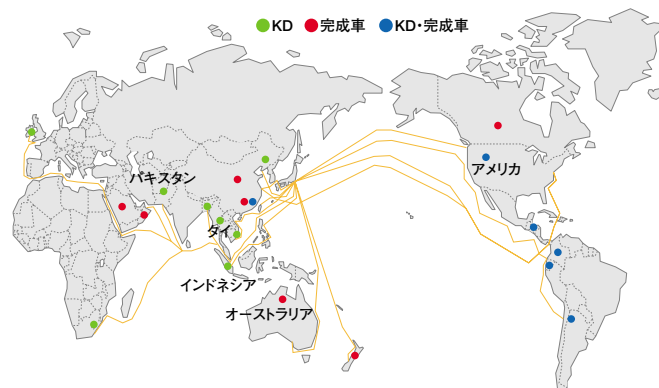
ダイレクト出荷^{※3}



2005年度ダイレクト出荷率



海外物流体系



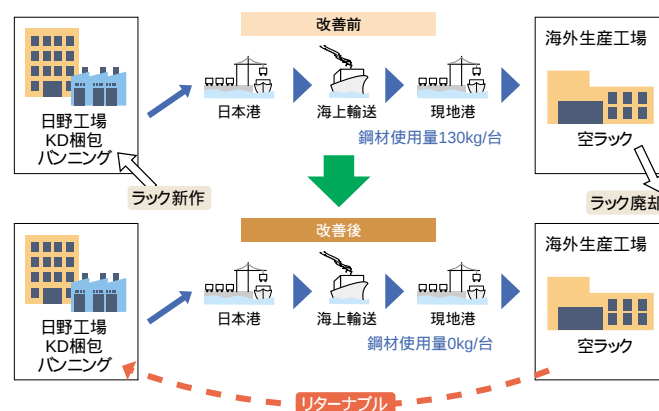
海外物流の改善

海外物流においては、充てん率および積載率の向上、ケース・ボックスのリターンブル化、包装および梱包方法の見直しを主に改善してきました。

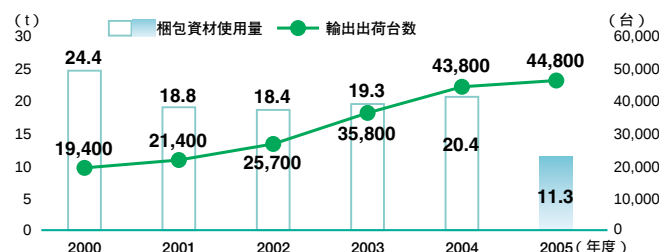
これらの取り組みは、CO₂の低減はもちろんのこと、資源の有効活用にも貢献しています。

改善事例

リターンブルラックの運用の改善



梱包資材総使用量の推移



TOPICS

関連会社の取り組み

VISION

**鋳物素材生産を通じて地球環境保全を推進し、
環境負荷の低減に努めています。**

福島製鋼株式会社は昭和28年の設立以来、独自技術による品質の高い鋳鋼製品を製造してきたグループ企業。トラック用アクスルハウジングやブレーキ部品など、足回り関連部品を日野自動車に供給してきました。環境意識が高まるなか、鋳物工業の宿命ともいえる廃砂のリサイクルに積極的に取り組んでいます。

福島製鋼株式会社……従業員は547人(2006年4月現在)。本社・福島県吾妻工場のほか
神奈川県相模工場がある



福島製鋼株式会社
取締役工場長

船山 美松

目指しているのは廃棄物ゼロ

砂を固めてつくった鋳型に、溶かした金属を流し込んで成型する鋳物。自動車ではエンジンや足回りなどに多くの鋳物製品が使われています。鋳物の製造工程では、でき上がった製品を取り出すために、砂でつくられた鋳型を壊す必要があり、この過程で大量の廃砂が生じます。とくに、中空製品をつくる際に使用する中子(なかご)は、特殊な加工が施されているためリサイクルが困難でした。

「化学的に有害な物質が含まれないこともあり、これまで廃砂は専用の処分場に廃

棄してきました。製品をつくっただけ廃砂が生じます。ただ捨てるのではなく、何とか再利用の方法を考えようということで、2005年から砂プロジェクトを発足。約半年の活動の中で、砂のみならず処分場行き廃棄物の総量を半減することができました。現在では砂プロジェクトを廃棄物低減プロジェクトとして改編し、将来的には工場から一切廃棄物を出さないことを目標に活動しています」。

船山工場長は、ゼロエミッションに向けての取り組みを語ってくれました。



造型ラインの砂型



鋳砂再生工場

専用再処理プラントを建設

プロジェクトが目指したのは、各工程から出る廃砂の適切な分別でした。主型と呼ばれる外枠に使われる砂は分離処理で容易に再利用できますが、中子に使われる砂はガラス成分が混入されているため堅く、そのままでは再利用できません。まずは、成分の異なる廃砂を分別することが重要でした。さらに、中子に使った砂については、専用再処理プラントを新たに建設しました。専門スタッフを配置したこのプラントでは、1月当たり約100tの廃砂が回収・処理されています。

「約半年の活動で、廃棄量は半減しましたが、捨てているものの中にもまだ再利用可能なものが含まれています。中子に使った砂の再処理プラントを増設し、さらにリサイクル率を高めていきます」。

現在、工場では砂関連だけでも7種類の分別がおこなわれています。砂以外にも含めると80種類を超える分別が実施されていま

す。念が入っているのは、従業員が飲んだ空き缶のうち、スチール缶を集めて鋳物の原料にしていること。

「量としては微々たるものですが、従業員の環境意識を高めるうえで意義あることです」。

さらには、鋳物製造工程全体をリサイクル型に刷新することも視野に、福島製鋼では廃棄物ゼロを目指しています。



リサイクル可能な砂をさらに成分ごとに分別

Column

鋳鉄からの廃棄物を利用し、路盤用再生レンガを開発

福島製鋼の環境への取り組みは、『砂』に関するものだけではありません。鉄を溶かしていく溶解工程で発生する「ノロ(鋼滓)」を再利用してつくる、路盤用再生レンガの製造にも成功しています。全溶解量の約5%排出されるノロの元は、鋳鉄の中の硫黄分などの不純物を吸収するため電気炉に入れられる珪素やカルシウム成分で、『滓』とは言え、製品の品質を高めるために使われたものを、さらに新たな製品に甦らせた再生レンガです。



グローバル企業としての取り組み

VISION

**世界の環境フロンランナーとして、
地球環境の保全にグループ丸で取り組みます。**

日野自動車の海外事業は、輸出を始めてからおよそ半世紀。現在では、世界中の拠点が地域に根ざした活動をそれぞれおこなっています。地球環境の保全に向けて、さらに取り組みを加速させていきます。

Key Word

140力国

日野自動車のトラック・バスが
販売されている国数

グローバル生産環境会議

2005年9月、海外の日野自動車生産系関連子会社6社の環境担当役員と、現地環境スタッフ約40名が日野自動車本社に集い、「グローバル生産環境会議」を3日間にわたり開催しました。各社の代表が取組事例の紹介をおこない、成果や課題をグループで共有したほか、排水処理実験や工場見学などをおこないました。

また、2006年3月にHMMT本社^{※1}にて開催された「海外生産事業体全体会議」においては、各社代表が2010年に向けた環境取り組みプランを発表し、日野グループ2010年環境取り組みプランをグループ丸となつて必達することを再確認しました。

今後も、世界各地の環境担当者が活発に議論し、交流を深める場を定期的に持つこ

1 HMMT(Hino Motors Manufacturing(Thailand) Ltd.)
.....日野モータースマニファクチャリングタイランド株式会社(タイ)

とにより、「各社の取り組みが、素早く、みんなで共有される」グループ風土づくりを進めていきます。



グローバル生産環境会議

TOPICS

HMMI^{※2}の取り組み

HMMIは1982年にインドネシアのジャカルタに設立され、エンジンの組み立てを開始しました。2003年にジャカルタから東へ約80km離れた緑豊かなKBI(現地語で美しい丘の町)工業団地内に新工場を建設し、念願であった自社工場でのエンジンから車両までの一貫生産を開始し、お客様によりよい製品を供給することが可能となりました。

主な生産品目には、中型トラック、バスシャシなどの車両およびエンジン、アクスルなどのユニット部品、トヨタインドネシア向けの2t車のエンジンなどがあります。2005年にはISO14001を取得し、美しい自然を守るために全社員一丸となって環境保全活動を積極的に推進しています。

●もったいない活動

《廃材を利用したの部品ラックのリターナブル化》

日野自動車の環境キーワードである「もったいない」という視点で社内のムダを見直し

たところ、現地で使用する部品の約70%が日本からの輸入部品で、その部品を梱包しているラックが1月に約150tも使い捨てされていることがわかりました。

そこで、現地のラック製作会社と共同で、使い捨てラックを再利用してリターナブルラックを製作できるか検討し、2000基の使い捨てラックをリサイクルすることに成功しました。廃材を利用することで製作コストを抑えられたことはもちろん、150t/月にも及んでいた廃棄物をゼロに近づけられたことに、大変満足しています。

今まで廃棄されていたラックは、再生リターナブルラックとして生まれ変わり、今日もインドネシアと日本を回り続けています。

●ジャカルタクリーン作戦

電車などの公共交通機関の整備が遅れているジャカルタは、慢性的な渋滞、排ガス公害に悩まされています。そこでインドネシア政府は、バス専用レーンを設置するなど対策に

乗り出しました。その一翼を担っているのが、日野製のクリーンエンジンバスです。現在、バスレーンを走るバスの102台中63台が日野製のバスです。

私たちは「もっとクリーンに」を合言葉に、バスレーンへのCNGバスの導入を2006年9月を目標に準備中です。今後、排ガスの少ないCNGバスの登場が、ジャカルタの環境保全に貢献できると確信しています。

●地域社会への貢献活動

インドネシアでは、文房具が買えない子どもたちが大勢います。私たちは定期的に地域の小学校を訪問し、微力ながらもノートやえんぴつなどの寄付をおこなっています。また、この機会を利用して、少しでも環境保全の大切さを子どもたちに伝えることができればと考えています。

HMMIはこのような活動を通じて、地域社会に貢献できる会社でありたいと願っています。

2 HMM(HINO MOTORS MANUFACTURING INDONESIA).....日野インドネシア製造



車両組立ライン
従業員は約400人



再生リターナブルラック
(左)日本から部品を梱包してきたラック
(右)日本へ返却予定のラック



ジャカルタのバスレーンを走る日野製のバス

販売活動での取り組み

VISION

販売活動の環境マネジメントにも、積極的に取り組んでいます。

自動車産業の事業活動においては、サービス分野もまた大きな領域を占めています。日野自動車では、販売活動における環境影響についても積極的な取り組みを進め、販売会社環境マネジメントシステムを構築して、さまざまな活動を展開しています。

Key Word

179拠点

2005年度に認定された
「エコ・マネジメントディーラー」数

「エコ・マネジメントディーラー」認定

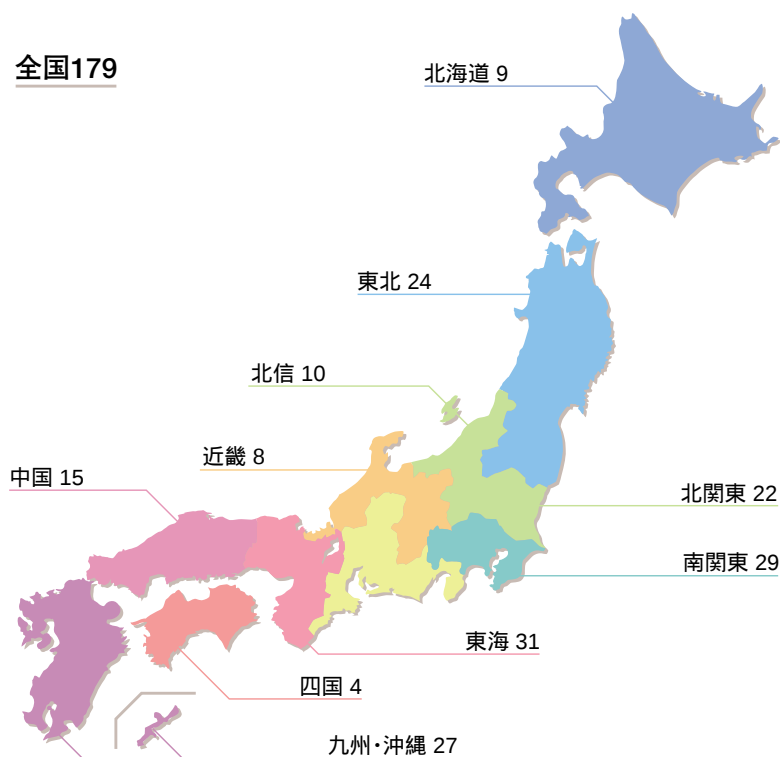
車のライフサイクルにおいて、お客様と直接かかわるのが使用・サービス分野です。日野自動車では、整備工場を持つすべての販売会社41社と連携し、「販売会社環境マネジメントシステム」を2002年度よりスタートしました。

このシステムは、環境関連法規や日野自動車独自の項目を織り込んだ「販売会社環境ガイドライン」を毎年すべての販売会社に向けて発行し、この遵守状況を監査したうえで、100%の取り組みがなされていると判断した販売会社(拠点)について、「エコ・マネジメントディーラー」として認定するというものです。

2005年度は、38社179拠点が「エコ・マネジメントディーラー」として認定されました。

「エコ・マネジメントディーラー」認定拠点数一覧

全国179



各地区別の認定拠点数を記しています。



エコ・マネジメントディーラー認定式



監査風景



監査風景



認定証



東京日野自動車株式会社
代表取締役社長
丸山 周作

「ISO14001取得はひとつの結果でしかない」 環境対策は不断の努力と継続こそが重要との思いで より高いレベルでの社会的使命を追究

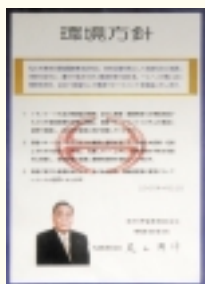
良き企業市民として地域社会と協調し、将来の世代に、豊かで住みやすい環境を受け渡す——東京日野自動車の環境方針にはこんな一文があります。「言うは易く行うは難い」。この理念を追究するべく、どんな活動が繰り返されているのか。伺ったお話からは「ISO取得は第一歩にすぎない」という強い信念が感じられました。

都心に立地するサービス拠点 だからこそその困難と意義

「東京都と埼玉県をフィールドに、16拠点を展開しているのが東京日野自動車です。社会的要請に応えて、私たちが大きく変革していくこと。それは、トラック・バスのサービスを担う私たちの使命なのです」。東京日野自動車の丸山周作社長は力をこめて語られます。

近年、車検などの作業は週末に集中する傾向が顕著になってきました。ところが、一時に作業が集中すると作業が夜間にまで及び、近隣住民の方々にご迷惑をお掛けする事態にもなりかねません。そこで東京日野では、近隣住民の方々へのさまざまな配慮を実行しています。

「数多くのトラック・バスが稼働している大都市だからこそ、都心部に立地する拠点には利便性があります。しかし、お客様にとって便利な場所は、同時に人口密集地である場合も少なくないのです」。



東京日野自動車の
環境方針

ISO14001を取得した現場で 発揮された知恵と工夫

環状7号線に近い場所に立地する江戸川支店は、本社とともにISO14001を取得しています。

「開設当時は民家もまばらな土地でしたが、今では支店を取り囲むように何棟ものマンションが建ち並んでいます」。

吉田潔支店長がスタッフたちと力を入れたのは、騒音軽減と塗装作業による溶剤などの飛散防止でした。

「車検作業は従来、2人がチームを組んでおこなっていましたが、4人チームに改編し、作業員のそれぞれが責任を持って1輪を担当することで、スピードアップと安全性向上を実現しました」。

このチーム改編は作業時間を1/3～1/4に短縮。同じ時間で作業を実施できる車数が増えたことで、夜間作業を大幅に削減したそうです。

また、スピードメーター試験のような大きな音がでる工程は二重シャッターで防音された専用ピットを設けて実施しています。

お客様の理解を得ながら、 真の顧客サービスを目指す

「環境対策は私たちの会社だけでなし得るものではありません。お客様のご理解も不可欠です」。

たとえば作業受付は午後5時までにする。専用塗装ブース以外での塗装をおこなわないため、塗装作業の混雑時にはお時間をいただくなど、お客様の理解を得ながら改善を進めている面も少なくないとのこと。

「本社と江戸川支店では環境ISOも取得し、これは全社的に横展開していきたいと考えていますが、私自身はそれだけではまだ足りないと考えています」。

丸山社長には、機会があるごとに社員に語りかけている言葉があります。それは、「認証取得はひとつの結果でしかない。大切なのは継続だ」。そして、「社会的使命を果たせる会社になることが、ひいてはお客様へのサービスにつながる」。

環境対策が短期的にはお客様の要望にそぐわないケースもあるだけに、その言葉には重みがあります。



4人チームで車両点検を実施



二重シャッターで防音された
専用ピット



塗装作業にも制限

日野自動車の 社会分野での取り組み

私たちの考え方

私たちの事業は、お客様や取引先、従業員をはじめとした多くのステークホルダーの皆様との信頼関係で成り立っています。「信頼される企業」こそが日野自動車の目標です。

お客様に喜んでいただくために

〈お客様への取り組み〉

お客様からいただいた情報をもとに、最適な製品を提供するとともに、24時間365日対応などさまざまなアフターサービス、サポートをおこなっています。

→ 詳しくは**37～38ページ**を参照

一緒に働く仲間との関係

〈従業員とその家族とのかかわり〉

「日野倫理綱領」のもと、従業員が安心して働ける職場環境の整備、多様な支援制度を推進しています。

→ 詳しくは**35～36ページ**を参照



トラック・バスづくりを原点に
地球、社会の持続的発展への貢献を通じ
よき企業市民としてステークホルダーの皆様から
信頼され続けることが目標です

現在、日野自動車のトラック・バスは、世界140カ国以上で活躍しています。私たちは、人、そして物の移動に役立つトラック・バスづくりを原点に、地球、社会の持続的発展を目指し、よき企業市民として貢献したいと考えております。私たちは、全世界にさまざまなステークホルダーの皆様から、日野自動車という企業集団を信頼いただき、存続を望まれる存在であり続けることを目標としています。

ここでは、ステークホルダーの皆様との信頼関係の構築に焦点を当てた取り組みについて、いくつかご紹介します。

社会の皆様との関係

〈地域社会、社会とのかかわり〉

さまざまな社会貢献活動を通じて、地域社会や社会から信頼される企業を目指しています。

→ 詳しくは39～42ページを参照

- 社会の中で信頼される企業風土づくり
- 安全で働きがいのある職場づくり
- お客様への取り組み
- 社会とのかかわり
- 地域社会への貢献

これからも、私たちは企業集団の力を結集し、世界のさまざまなステークホルダーの皆様のご意見に耳を傾けながら、より多くの努力を重ね、皆様の信頼にお応えし続けるよう取り組んでまいります。



取締役副社長
杉崎 慎一郎



社会の中で信頼される企業風土づくり

VISION

社会における日野自動車に対する信頼の維持・向上を目指し、コンプライアンスの推進に取り組んでいます。

日野自動車は、コンプライアンスへの真摯な取り組みが、企業市民としての社会的な責任を果たすことにつながると考えています。

Key Word

志・姿勢・実行

2002年6月に策定された
日野自動車社員の行動指針

日野自動車の コンプライアンス活動

日野自動車では、コンプライアンスを法令はもとより、企業倫理・社会規範などの広い範囲を遵守し、「お客様・株主・取引先・従業員・その他のステークホルダーからの期待にすみやかに応えていくこと」と考えています。すなわち、日野自動車は、「お客様を含めた社会の中での、日野自動車に対する信用・信頼の維持・向上」をコンプライアンス活動の目標にしています。

『日野倫理綱領』の制定、 ガイドブックの配布

日野自動車では、従業員が社会や会社として自分自身に対してつねに誠実に行動するための指針として、2003年1月に『日野倫理綱領』を制定しました。『日野倫理綱領』は、一人の社会人・企業人として日野自動車の従業員が日々心がけるべき行動と心構えを示しています。

また、従業員のコンプライアンスに対する理解を深めるために、各種研修の実施に加え、100の事例を取り上げた『コンプライアンス ガイドブック』を配布しました。

日野倫理綱領



『日野倫理綱領』の内容

- 会社との関係における行動基準
明るい職場づくり、資産の管理、機密の管理
- 会社の活動における行動基準
安全衛生活動、開発活動、環境保護活動、安全性向上活動、調達活動、生産／物流活動 など
- 社会との関係における行動基準
企業広報活動、社会貢献活動、株主との関係、政治／行政との関係
- 私的行動についての行動基準
違法行為・反社会的行為 など

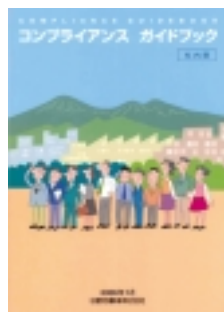
「コンプライアンス・ リスク管理委員会」の開催

日野自動車では、コンプライアンス活動を経営トップが先頭に立って積極的に推進するために、取締役・常勤監査役が委員として参加する「コンプライアンス・リスク管理委員会」を定期的に開催しています。この委員会では、コンプライアンス・リスク管理に関する課題・対応指針などが審議・決定されています。

「HINOコンプライアンス 相談窓口」の開設

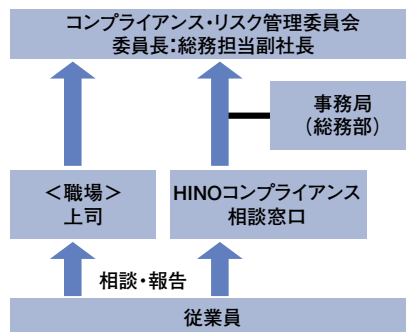
日野自動車では、従業員に対し、5つの「コンプライアンス・センサー」を働かせ、コンプライアンスに関する問題がないか、セルフチェックすることを呼びかける携行カードを配布しました。

また、従業員がコンプライアンスに関する問題を発見した場合、職場を補完する相談先として、日野自動車では社外弁護士が受付を担当する「HINOコンプライアンス相談窓口」を設置し、社内への周知を図っています。従業員は、直通ダイヤルや専用メールアドレスにより相談窓口へ直接報告・相談することができます。窓口では守秘が徹底され、相談者が不利益を受けることはありません。



コンプライアンス ガイドブック

コンプライアンス体制（概要図）



コンプライアンス・センサー

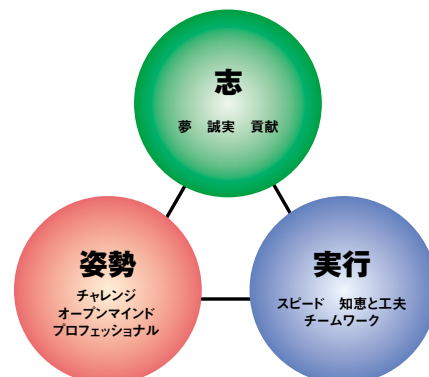
あなたのその判断は・・・

- 法令、日野倫理綱領、社内ルールに反していませんか？
- 社会の常識、お客様の期待に反していませんか？
- 会社の理念・方針に合っていますか？
- 自分の良心で正しいと感じていますか？
- 家族や友人に誇れますか？

日野スピリット (社員の行動指針)

2002年6月、仕事をするうえで大切にすべき価値観や行動規範を明らかにした『日野スピリット』を策定しました。策定にあたっては各職場から多くの人が参画し、自由に意見を述べ合いました。日野スピリットは、意識改革活動や社員教育の中にもその精神が盛り込まれ、入社式では新入社員にも紹介されています。

日野スピリット



安全で働きがいのある職場づくり

VISION

従業員が安心して働くことができ、
成長を実感できる職場づくりを目指しています。

従業員の健康と安全の確保を基盤に、一人ひとりが意欲的に、もてる力を最大限発揮できる職場づくりを目指しています。個が集結した組織として、人材育成や人事制度の充実に取り組みながらスパイラルアップを図っています。

Key Word

モチベーション
&
スパイラルアップ

社員がイキイキと働き
成長できる職場へ

労使の相互信頼・相互責任

創立60周年を機に起草した「60（ロクマル）日野労使リニュー宣言」の中で謳われているように、「相互信頼・相互責任」は従業員とのかかわりの中で、基本的な柱です。この精神のもと、各職場・各階層で盛んに労使コミュニケーションの場がもたれています。

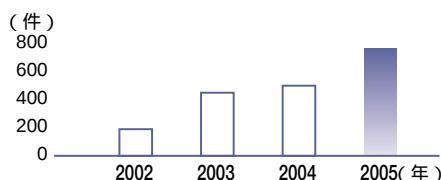
多様な働き方の支援

社員のよりよいワーク・ライフバランスの実現や次世代育成支援策の一環として、ライフステージに応じた育児、介護などの休職制度があります。育児休職は満2歳に到達後の3月末まで取得でき、制度発足以来のべ約460人が利用しました。復職後の仕事と育児の両立支援策としては、短時間勤務制度、看護休暇制度、フレックスタイム適用者におけるコアタイムの廃止など、社員が利用しやすいよう改善を続けています。

社員褒賞制度

従来からあった褒賞制度を2004年度に見直し、社員のモチベーション向上を狙い、拡充しました。「部長賞」「役員賞」「社長賞」と勝ち上がりによるゲーム感覚を盛り込み、「スピード賞」「チャレンジ賞」など、日野スピリットに呼応した各賞も設定しました。とくに「オープンマインド賞」は、社員の地域貢献や社会貢献を促進する目的で設けました。

社員褒賞件数

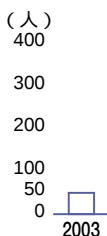


人材育成

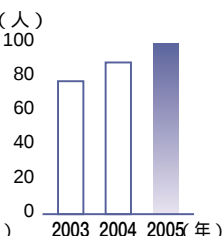
社員一人ひとりが十分にその力を発揮し、イキイキと仕事ができるよう、職場(OJT)と人事部(OFF-JT)が協力して、社員の育成に取り組んでいます。

事務技術職では、中堅クラスで「仕事の進め方」を、また、基幹職クラスでは「マネジメント力」の養成をカリキュラムの核にしています。技能職においては、職層別研修と専門技能研修の2軸で、モノづくりの核となる人材を養成しています。さらに、将来の姿を描きながら自ら能力開発にチャレンジできるよう、2006年度から技能等級認定制度の導入を開始します。

語学教育 受講実績



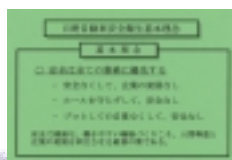
中堅職層特別 研修受講実績



労働安全と健康

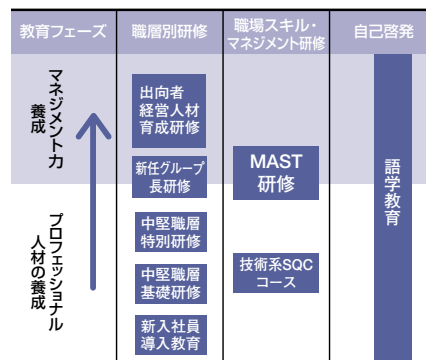
日野自動車では、「日野自動車安全衛生基本理念」に基づき「安全は全ての業務に優先する」とし、安全で健康な、働きやすい職場づくりこそ、人間尊重と企業の発展を両立させる最善の策であると位置づけ、安全衛生管理に取り組んでいることを社内外に対し明確に表明し、全従業員の意識の共有化を図っています。

そして、この理念に基づき労働安全衛生マネジメントシステム(OSHMS)の導入をはじめとして、労働災害の未然防止に向けて積極的な安全衛生活動を展開しています。



安全衛生基本理念カード

事務技術職人材育成体系図



メンタルヘルスケア

1998年よりメンタルヘルスケア体制の確立を図っています。管理・監督者を対象に定期的に研修会を開催し、メンタルヘルスに対する意識を高めるとともに、全社員にアンケートを実施し、その結果をコミュニケーション向上に活かしています。

また、管理者層向けのメンタルヘルスマニュアルを、社外の専門カウンセラーの協力を受けて作成しました。

さらに、社外の専門カウンセラーによる定期的な個別相談窓口の設置、外部の電話相談窓口紹介などケア体制の充実を図っています。

2005年度メンタルヘルス研修会受講実績

実施場所	受講者数
日野工場	71人
羽村工場	25人
新田工場	21人
田町事務所	9人
全社計	126人

お客様への取り組み

VISION

**お客様にトラック・バスを安心して長くお使いいただくために、
さまざまなサポートをご提案しています。**

日野自動車は、トラック・バスを安心して長くお使いいただくために、
品質保証はもとより、さまざまなサービス・サポートもご提案しています。

Key Word

162拠点

全国に広がる24時間365日対応
できるサービスネットワークの
拠点数(2006年3月現在)

24時間365日対応

日野自動車では、昼夜を問わず働かれて
いるお客様の車両故障などの緊急時にお応
えするために、24時間365日対応できるサー
ビスネットワークを全国162拠点で構築して
います。最新設備を搭載したサービスカー
「Dr.DUTRO」とサービスエンジニアが出動
し、安全・迅速に修理作業をおこないます。

整備品質の向上

お客様の安心・安全をサポートするため、
整備品質の向上に努めています。2S(整理・
整頓)はもちろんのこと、設備や共用工具の
メンテナンスを徹底し、安全で迅速な整備
体制の構築を目指しています。

また、整備作業の作業手順づくり、2人／
1軸(4人組み合わせ)による作業体制を推進
するなど、作業の効率化にも努めています。

お客様満足度の向上に 向けた考え・体制

日野自動車では、お客様第一の視点に
立って満足していただけるような製品づく
り、サービスを一人ひとりが心がけること
で、お客様との信頼関係を築いていきたい
と考えています。

お客様へのサポート内容

- お客様の声を反映
お客様相談窓口や販売会社へいただい
た情報を今後の企業活動に反映。
- 最適な車両づくり
お客様の用途にあった最適車両の提案。
- サービス面
お客様の車両を長く、安全に、かつ経済
的にお使いいただけるよう、最適なメン
テナンスメニューの提供。
- 車両故障時
販売会社と一体となり、万が一の車両故
障時に、24時間365日対応できる体制を
構築。
- その他サポート
環境・安全指向の高まりにお応えする
サポートを提供。

お客様対応

お客様相談窓口では、お客様からのさま
ざまなお問い合わせや苦情などに対応し、
今後の企業活動に反映するシステムを構築
しています。

2005年度に窓口にいただいたお問い合わ
せは約5,500件。その内、具体的な苦情やご
提案約400件を社内および販売会社にフィー
ドバックし、再発防止や製品開発時の課題
に盛り込みました。

アフターサービスメニュー

販売後の点検、整備などのアフターサービ
スメニューを作成し、お客様への提案をおこ
なっています。サービス内容は、メンテナンス
リース、年間整備契約の提供による予防整備
の展開です。また、約40のサービスメニュー
を揃え、お客様のご要望にお応えしています。

お客様テクニカルセンターの取り組みを
13～14ページで紹介しています。



改善支援部
業務改善室
サービス改善グループ
鈴木 力夫

大切なお客様の車の整備品質
を、いかにして向上させるかに注力
しています。整備工場の整理整頓、
ムダな作業の排除、整備手順書の
作成など、車検整備作業の精度・効
率を向上させることにより、ミスのな
い品質の高い整備がおこなえると
考えています。整備品質は、お客様
の安全運行に直結していますので、
責任は重大です。



品質保証部
車両保証室
勝田 豪

お客様が満足できる最高品質の車をお届けすることを、つねに念頭においています。そのためには、1台の車がお客様に届くまでに携わるすべての人が、役割を理解し、こだわりをもって取り組むことが重要だと考えます。これを浸透させるために、これからも信念をもって仕事に取り組み、お客様から「日野の車はいい車だね」と言われるよう頑張っていきます。



サービス技術部
サービス企画・総括室
企画・総括グループ
奈良 崇

最近では、お客様の環境意識が高まり、環境性能で車を選ぶ時代。今の車は、環境性能を向上させるために複雑な電子制御を用いており、ますます質の高い整備が必要です。

お客様に安心して日野の車をご使用いただき、完調の車で安全かつ環境に優しい運行をしていただけるよう、故障診断機の企画などのサービス施策を通じ、販売会社のサービスレベル向上を目指しています。すべてのお客様が安心して運行いただけるよう、これからもお役に立ちたいと思っています。

お客様へのグリーン経営認証取得のサポート

日野自動車では、環境改善に取り組んでいらっしゃるお客様をはじめ、認証取得を目指していらっしゃるお客様、従業員のモラル向上を図っていらっしゃるお客様に対して、グリーン経営認証取得のサポートを積極的におこなっています。

さらに、販売会社が主体となって、認証取得の際に必要な「省燃費運転講習会」「日常点検講習会」のお手伝いをしています。

品質保証への取り組み

日野自動車にとって「品質」とは、お客様に安心と満足を感じていただける、よい製品とよいサービスをお届けすることだと考えています。

そのため、仕入先～工場～物流～架装メーカー～販売会社～お客様に製品をお届けするまでのすべての工程において品質管理指標を定め、品質保証活動を実施しています。また、品質保証活動に関する情報は、経営陣に逐次報告をおこなっています。

お客様情報からの迅速な品質改善活動

日野自動車では、販売会社やお客様相談窓口寄せられたお客様の声を収集する体制を構築し、収集した情報は品質保証部に集約して分析、ならびに必要なに応じて現地調査や不具合品の回収・解析をおこない、関係部署で改善を推進しています。また、商品に欠陥ありと認められ、市場措置を講じる必要があると判断した場合は、届出、告知、改善措置、無償での修理などの必要な処置を迅速に実施します。

寄せられたお客様の声なども反映し、下記のとおり改善をおこないました。

	2003年度	2004年度	2005年度
リコール	9件	18件	8件
改善対策	1件	0件	1件
サービスキャンペーン	7件	12件	9件

活動事例

サービスマスターコース

お客様満足度のさらなる向上につなげるため、いつでもどこでも迅速かつ均一で質の高いサービスの提供を実現するための核となる、販売会社のサービススタッフの人材育成を目指し「サービスマスターコース」研修を2003年10月より開講しています。

研修生は1年間にわたり、安全・環境対応や車両性能向上にともない高度化する装置やシ

ステムへの対応力を身につけるほか、お客様から信頼される対応能力の向上に努めます。

研修対象者は販売会社に入社後5～10年の整備関係業務経験者で、全国の販売会社から募集し、選抜試験をおこないます。2005年10月より第3期生が受講中です。今後も、毎年20人前後の人材を継続的に育成していきます。

サービスマスターコースのカリキュラムの一例

		講義内容
サービスエンジニア関係	メカニカル分野	新技術・新機構の理解と整備技術の講習、上物架装整備、故障診断、自動車工学
	電気・電子分野	電気・電子制御システム整備実務と故障診断
セールスエンジニア関係		商品、架装、法規知識
サービスマネジメント関係		サービス工場管理、フロント対応、改善活動、環境・安全衛生、国内・海外工場視察

当社の製品を長くお使いいただくために、メンテナンスメニューの提供とPRを積極的に推進していきます。

また、点検・整備を確実に実施し、事故等を未然に防ぐための啓発活動をおこなうとともに、点検インターバルを延長させるための製品の改良も推進していきます。

社会とのかかわり

VISION

**グローバルに活動する企業として、
広範多岐な社会貢献活動をおこなっています。**

日野自動車は、「環境フロンティア」「安全フロンティア」として、さまざまなイベントに出展・協賛しています。また、環境面だけでなく、文化活動支援などもおこなっています。

Key Word

**クリーン
&
グリーン**

緑豊かな地球を目指して

(財)日野自動車グリーンファンド

●「見守るころ、育む活動を応援します」

(財)日野自動車グリーンファンド(HGF)は「社会環境との調和」を基本理念として、1991年に日野自動車の出資により設立されました。「地球規模で考え、行動は足元から」をモットーに、さまざまな環境緑化、自然保護にかかわる事業の実践、助成をおこなっています。

●環境大臣賞受賞

2005年6月6日、HGFは平成17年度環境大臣賞「環境保全功労者表彰」を受賞しました。この賞は、環境保全および地球環境美化に関し、長年にわたり顕著な功績があった団体などに対して、その功績をたたえるために、毎年度、環境大臣より表彰されるものです。今回の受賞は、HGFが14年間継続的に取り組んできた自然環境保全活動が評価されたものと考えています。

HGFは、これからも自然環境における植樹活動・保全活動・調査研究・啓発活動に対する助成活動や各種行事などを通じて、自然環境保全や心豊かな社会の実現に貢献していきます。



授賞式の様子

●春の森の集い

2005年5月28日、HGFの森(八王子市)にて林野庁の協力のもと、「森に親しむ集い」を開催しました。当日は53名が参加し、森の中に隠した造花などの人工物を探し当てるネイチャーゲームや、植物観察、丸太切りなどの体験教室をおこない、自然と楽しくふれあうことで、自然を守ることの大切さを学びました。



森に親しむ集い

●秋の森の集い

2005年10月29日、八王子市にある高尾山自然休養林日影沢第二園地にて林野庁の協力のもと、「炭焼き体験」を実施しました。当日は、炭づくり工程(炭窯への木材入れ、火付け、炭出し、窯閉め)の一連の作業をおこなう体験のほか、花炭づくり、焼き芋づくり、植物観察をおこないました。



高尾山自然休養林の炭焼き体験

2005年度の年間行事

- 4月 多摩川・浅川クリーン作戦
- 5月 春の森の集い(高尾山)
- 6月 総会(理事会・評議員会)
- 8月 助成先選考委員会#1
- 9月 助成先選考委員会#2
- 10月 秋の森の集い(高尾山)
- 11月 助成金贈呈式・活動発表会
- 1月 環境講演会



(財)日野自動車グリーンファンド
専務理事
(現:明友機工(株)代表取締役社長)
齋藤 利彦

当ファンドでは、「地球規模で考え、行動は足元から」をモットーに、全国の植樹活動や自然環境の保全活動に対する助成をおこなっています。さまざまな人々の、さまざまな環境活動を応援することで、地球環境保全に寄与しています。地道な取り組みですが、いつか当ファンドがお手伝いした活動が大きく花開くことを願っています。

●助成金贈呈式・活動発表会

2005年11月26日、日野自動車21世紀センターにて、「(財)日野自動車グリーンファンド助成金贈呈式・活動発表会」が開催されました。贈呈式では、39件の応募の中から厳選された12件に助成金が贈呈されました。発表会では、昨年度の助成団体が熱意のこもった発表をおこないました。



助成贈呈式・発表会

●環境講演会開催

2006年1月20日、日野自動車本社大ホールにて、環境講演会を開催しました。講演では、温暖化による自然災害が与える影響について、樹木の衰退の現状について実体験を踏まえながら説明がおこなわれ、80名の参加者は熱心に聞き入っていました。



講演会の様子

さまざまなイベントへの出展

日野ブランドのさらなる浸透を図るため、さまざまなイベントに出展しています。

出展に当たっては、「環境フロントランナー、安全フロントランナーの日野」として最新の低公害技術や安全技術のご紹介、それらを盛り込んだ車両のご紹介などをおこなっています。また、バリアフリーの観点からは、市街地を走る低床バスの出展もおこなっています。

●2005年度の主な参加実績

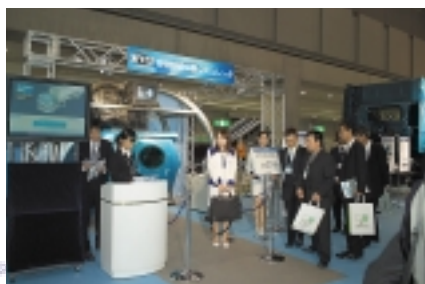
- ・バリアフリー展(大阪／2005年4月)
- ・人とくるまのテクノロジー展(横浜／2005年5月)
- ・エコカーワールド(横浜／2005年6月)
- ・トラックショー(東京／2005年10月)



バリアフリー展(小型低床バス)



トラックショー(技術展示)



トラックショー(安全技術シミュレーター)

エコカーワールド2005への参加

環境省、横浜市等が主催するエコカーワールド2005に参加しました。このイベントは、低公害車の普及を目的に、毎年6月に開催されています。横浜みなとみらい21赤レンガ倉庫の会場には、多くのお客様が来場されました。

当社からは、ハイブリッドバス、低公害トラック等を出展しました。



イベントの様子

インターンシップへの協力

日野自動車では、企業市民として学生へ社会経験の機会を提供するインターンシップを積極的に受け入れています。

インターンシップは短期型(夏季の1カ月程度)と通年型(6カ月程度)があり、2001年度は1校13名、2002年度は1校2名、2003年度は8校25名、2004年度は10校17名、2005年度は11校26名が参加しました。

地域社会への貢献

VISION

**安全で安心してくらせる
社会づくりへの貢献に努めています。**

日野自動車では、さまざまな地域貢献活動を通して、地域住民との信頼関係の構築を図っています。また、一企業市民として果たすべき役割を自覚し、社会の要請に応じていけるように努めています。

Key Word

**ともに語り
ともに歩む**

地域こそが企業活動の基盤

地域住民との交流

日野、羽村の各工場と日高配車センターでは毎年4月に地域の皆様に工場を開放し、「さくらまつり」を開催しています。2006年4月には日野、羽村ではそれぞれ1万人を超える来場者がありました。工場見学会、パリダカ車への試乗会などのほかに各種アクションや、社員のボランティアによる模擬店など盛りだくさんの内容です。新田工場では毎年秋に新田工場秋祭りが開催されます。無料の大鍋豚汁500人分など楽しい企画が喜ばれています。

地域の方々との絆を深める大切な機会として、今後も継続していきます。



日野工場さくらまつり



羽村工場さくらまつり



日高配車センターさくらまつり



新田工場秋祭り

活動事例

新田工場の地域貢献活動

新田工場では、地域社会との融和を目指し、2カ月に1回、周辺住民との情報交換会を開催しているほか、年に3回、地域の美化活動に積極的に参加しています。

情報交換会では、高齢化に悩んでいた早川地区の要請に応え、太田市の新田地区体育祭や早川納涼祭などに積極的に参加協力するなど、地域に根ざした活動をおこなっています。



美化活動は、周辺住民と合同で年2回、自主的な取り組みとして年1回、実施

地域住民懇談会

日野自動車の生産活動に対する地域住民の理解を深めるため、日野工場および羽村工場において地域住民懇談会を年1～2回実施し、新田工場では情報交換会を2カ月に1回実施しています。

懇談会には住民の代表者や市議会議員らが参加し、意見交換をおこなうほか、日野自動車からは工場の稼働状況、大規模工事の事前説明、近隣への対応状況などを報告しています。



地域住民懇談会

工場見学への対応

日野自動車では、地域の小中学生を対象とした社会科見学、就職希望者の会社訪問、地域住民への活動報告等の工場見学を受け入れています。

自動車の生産工程を通して、日野自動車の品質に対するこだわりや、環境への取り組みなどを理解していただくほか、モノづくりや環境への配慮などに関心をもってもらうことで、社会への貢献を図っています。

●見学者の受け入れ実績（2005年度）

日野工場 約22,000人

羽村工場 約5,998人

新田工場 約1,000人



日野工業高等学園
生徒育成グループ

前田 貞好

当学園の卒業生は、将来の日野自動車の「モノづくり」を担う人材として、日野自動車に入社します。当学園在学中の3年間で、日野自動車の事業活動は、地域住民の方のご理解、ご協力をいただかなくては成り立たないことを学びます。地域の方から、学園生にお褒めの言葉をいただくことができるように、地域とともに発展する姿勢「企業市民マインド」を身に付けた立派な社会人を育てるべく、日夜奮闘しています。

マレーシア人研修生受け入れについて

(財)省エネルギーセンター(ECCJ)の国際研修部より、同財団の研修生受入事業の一環として、「自動車生産向上におけるエネルギー管理、省エネ活動の推進」をテーマにした研修の申し入れがあり、2006年1月17日、日野本社にて研修会を実施しました。

マレーシア人研修生21名、ECCJほかより5名が参加し、日野自動車という会社およびその製品についてご理解いただき、また省エネ活動についても、事例を通して学んでいただきました。工場見学ではライン整備とAGV、事例紹介ではコンプレッサー施設について、それぞれ活発な質疑応答がおこなわれ、研修後には、研修生より御礼の言葉と記念品が贈呈され、よい関係を築くことができました。



研修会の参加者

活動事例

地域行事への参加

日野工場と羽村工場では毎年11月に地域自治体主催の産業祭りにそれぞれブースを出展しています。日野自動車はバリダカ車、大型トラック「プロフィア」、小型トラック「デュトロハイブリッド」などの展示や大抽選会、ジャガイモ詰め放題のチャリティ即売会を実施しています。



(写真上・下)
日野市産業祭り

活動事例

日野工業高等学園の地域貢献活動

日野自動車が運営する日野工業高等学園では、環境教育の一環として全校生徒が年2回、地域の清掃活動をおこなっています。8月は日野市南平丘陵公園の日本野鳥の会所有の雑木林で、下草刈りや池の清掃、12月には日野駅から学園、体育館までの通学路の清掃を実施しています。

また、5月の体育祭、10月の学園祭では、地域住民の方々との交流を図っています。3月には1年生の総合学習として、市立老人福祉施設および保育園などで4日間の福祉体験実習を、地域貢献の一環として実施しています。



南平丘陵公園での
ボランティア活動



福祉体験実習の様子

Column

日野市カーデザイン教室の開催

日本の将来を担う子どもたちに、「クルマとデザイン」と「モノづくり」に対する知識と興味を深めてもらおうと、2004年から始まったカーデザイン教室も今回が3回目の開催となりました。2006年は、当社デザインセンターにおいて日野市教育委員会および自動車技術会と共同で、2月4日、18日、25日の3日間開催しました。

教室には、日野市在住の小学5・6年生13名が参加し、日野のデザイナーやモデラーの指導のもと、クルマのデザインとクレイモデルづくりを体験しました。

参加者からは「将来、自動車のデザインやクルマをつくる仕事がしたい」などのコメントをいただきました。



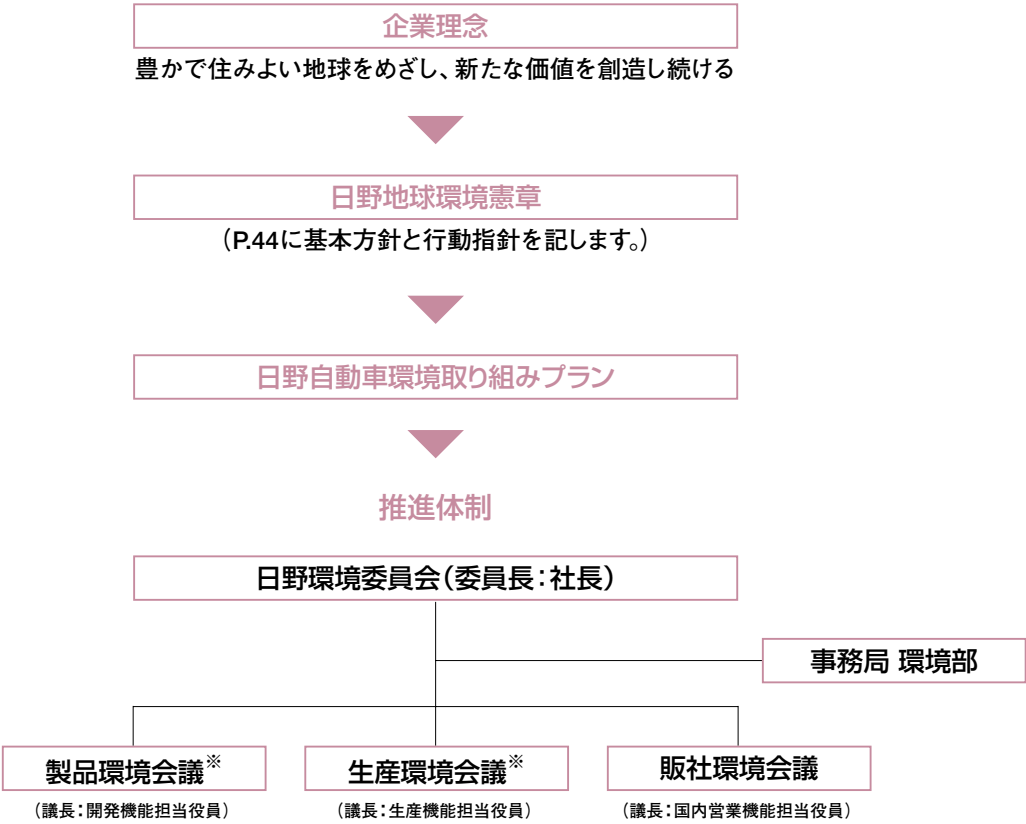
環境保全推進組織

日野自動車は、環境保全活動を経営における重要課題のひとつとして位置づけ、「日野地球環境憲章」と「日野自動車環境取り組みプラン」(ボランティアプラン)を策定するとともに、全社的組織である「日野環境委員会」を組織して、総合的な取り組みを推進しています。

環境保全推進体制

日野自動車は、1993年3月、環境保全活動の総合的な推進を目指し、「日野地球環境憲章」と具体的な行動計画「日野自動車環境取り組みプラン」を策定しました。同時に、社長を委員長とする「日野環境委員会」を全社横断的な組織として設置し、環境保全活動を推進しています。

さらに下部組織として「製品環境会議」、「生産環境会議」、「販社環境会議」を設置し、「日野自動車環境取り組みプラン」に基づく具体的な取り組みを推進しています。また2005年度は2010年に向けた、「2010年 環境取り組みプラン(第4次ボランティアプラン)」を策定しました。



製品環境会議、生産環境会議それぞれの下部組織が具体的な取り組みを推進しています(P.44参照)

日野地球環境憲章

～日野自動車の環境方針～

基本方針

1. 地球環境の保全を総合的かつ継続的に進めます

私たちはディーゼル車のトップメーカーとして、よりよい製品を世界各国の様々な人々に提供し、豊かな社会づくりに貢献し続けるとともに、その環境影響を認識し、事業活動のあらゆる場面において汚染の予防に配慮しながら継続的改善を進めることで、人と地球の持続的発展のために努力します。

2. 地球環境の保全を具体的かつ確実に進めます

私たちは環境マネジメントシステムの構築と運用を通じて、私たちに関連する法的及びその他の要求事項を遵守し、環境目的及び目標を定め、評価し、見直す活動を継続していきます。

行動指針

1. 事業活動全般並びにクルマのライフサイクル全てに亘る環境負荷の最小化を図っていきます

トップレベルの環境性能を有する製品を社会に提供し続けると同時に、この生産及び物流過程においても環境負荷を最小化する技術をたゆまず開発します。また、クルマのライフサイクルにおける全過程を包含する環境マネジメントシステムを構築し、運用します。

2. 関係会社とのパートナーシップをより緊密にして進めます

私たちが事業を営むには、多くの方々の協力が不可欠です。クルマづくりのパートナーと国内外で協力し合い、私たちの環境保全活動を更に大きな輪としていきます。

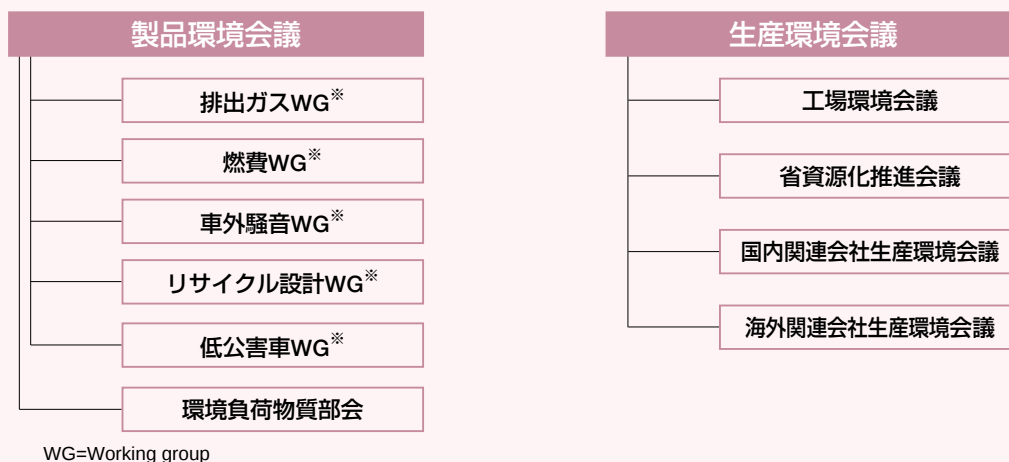
3. 情報開示・教育・啓発に一層つとめます

私たちの取り組みを一人でも多くの方に、より正確に知っていただくための活動を推進します。また私たち自らも、環境感性を磨き続けます。

4. 企業市民としての、社会的取り組みへの積極的な参画を行います

私たちが社会に対して出来ることは、よりよい製品の提供ばかりではありません。企業市民として、また地域に生きる企業人として、社会的取り組みに積極的に参画します。

■製品環境会議、生産環境会議の下部組織



2005年度の目標と活動結果

取り組みを推進するにあたり、マネジメント、開発、生産・物流の各分野における具体的目標である

日野自動車環境取り組みプランを策定し、年次ごとの目標達成度の評価を次年度の計画に反映し、活動を推進しています。

マネジメント分野		
項 目	取り組み方針	日野自動車環境取り組みプランの目標レベル
総合的な環境マネジメントの推進	●環境マネジメントシステムの適用範囲拡大と充実……自社国内全拠点(機能)でISO14001認証取得	●自社の国内全拠点(機能)でISO14001認証取得
国内外関連会社(仕入先)との活動充実	●ISO14001認証取得の拡大	●国内関連会社23社でISO14001認証取得(1社1事業所以上)
	●グリーン調達・購入の推進	●海外主要生産拠点(5カ所)でのISO14001認証取得 ●部品のグリーン調達を展開 ●事務用品・機器のグリーン調達を展開
販売会社との活動充実	●販売会社における環境マネジメントシステム構築の推進	●販社環境ガイドライン発行 ●国内全販売会社における焼却炉全廃

開発分野		
項 目	取り組み方針	日野自動車環境取り組みプランの目標レベル
燃費の向上	●要素技術と車両制御技術開発による各国、各地域でのクラストップレベルを確保	●要素技術と車両制御技術開発によるクラストップレベル確保
排出ガスの低減	●ディーゼルエンジンの画期的なクリーン化	●クリーンディーゼル車の早期導入
クリーンエネルギー車の開発	●クリーンエネルギー車の積極的な開発と拡販	●普及拡大に向けたハイブリッドシステムの一層のレベルアップと搭載車種の拡充 ●CNG等各種クリーンエネルギー車への継続取り組み
リサイクル性の向上	●2015年リサイクル実効率95%に寄与するリサイクル設計の推進	●リサイクル設計の車両への織り込み
環境負荷物質含有量の管理と低減	●化学物質の管理とトップレベルを目指した取り組みの推進 ●環境負荷物質の低減	●管理対象物質の拡充とフォロー体制の強化 ●鉛使用量1996年比1/4以下に低減
車両騒音の低減	●自動車騒音の一層の低減による商品力の向上	●次期騒音規制対応車の導入
フロン低減	●車両における冷媒量の低減	●冷媒使用量の低減1995年比10%低減

生産分野 物流分野		
項 目	取り組み方針	日野自動車環境取り組みプランの目標レベル
地球温暖化防止対策の推進	●CO ₂ 低減対策の積極的な推進	●2005年度末までにCO ₂ 排出量／売上高を2000年度比5%低減(23.8t-CO ₂ /億円) (2010年度末までにCO ₂ 排出量1990年度比10%低減)
環境負荷物質の管理・低減	●PRTR法対象物質の低減	●PRTR法対象物質を1998年度比30%低減 ●VOC排出量をボディライン平均55g/m ²
廃棄物低減と省資源	●ゼロエミッションを目指した廃棄物低減、省資源化活動の推進	●埋立廃棄物ゼロを全工場で達成 ●焼却廃棄物を1990年度比1/3以下
水資源の節約	●水使用量の低減	●水使用量台当たり原単位2000年度比10%低減(8.86m ³ /台)
物流合理化の推進	●梱包・包装資材使用量の低減に向けた物流合理化の積極的推進	●梱包・包装資材総使用量を2000年度比20%低減

2005年度目標	2005年度結果
●2002年度全事業所でISO14001認証取得済み	●2002年度全事業所でISO14001認証取得済み
●2003年度内全社認証取得	●2004年度中に全社認証取得済み
●各生産拠点の操業に応じた認証取得計画支援 (2002年9月調達ガイドライン発行済) (2001年度完了・継続推進)	●米国日野製造:2006年3月キックオフ ●2002年9月国内全仕入先に「環境に関するガイドライン」発行済み ●グリーン購入率100%を継続
●ガイドライン発行	●38社179拠点でガイドライン全項目達成

2005年度目標	2005年度結果
●燃費基準の対応推進	●大型トラック・バスの一部車種で燃費基準を達成
●平成17年(新長期)排出ガス規制対応完了	●新長期排出ガス規制対応完了
●新長期排出ガス規制適合ハイブリッド車の開発	●小型トラックハイブリッド車の開発完了
●CNG車の車種拡大	●新長期排出ガス規制対応中型トラックの発売
●リサイクル性の評価の推進	●ボディ主要部品についてチェックシート作成
●環境負荷物質の管理・フォロー推進	●環境負荷物質部会で低減活動推進
●鉛使用量1996年比1/4以下に低減	●達成済み
●市場環境を考慮した低騒音化	●新長期排出ガス規制より全車両で低騒音化推進
●原単位低減目標20%低減(1995年比)	●達成済み

2005年度目標	2005年度結果
●2000年度比5%低減	●2000年度比19%低減
●1998年度比30%低減(800t以下) ●平均55g/m ² (2001年度完了・継続推進) 1990年度比1/3以下(2,770t)	●1998年度比35%低減 ●ボディライン平均50g/m ² ●埋立廃棄物ゼロを維持 ●1990年度比75%低減(2,100t)(目標2,770t/年)
●2000年度比10%低減	●2000年度比25%低減
●2000年度比20%低減	●2000年度比53%低減

日野自動車「2010年 環境取り組みプラン」

商用車の環境フロントランナーを目指して

日野自動車は、2006年度から2010年度までの環境への取り組み実行計画として、

「2010年 環境取り組みプラン(第4次ボランタリープラン)」を策定しました。

この実行計画では、社会の生活基盤を支える商用車メーカーとして、今後予想される環境問題や社会動向を考慮し、

『企業行動全般にわたる環境負荷の低減』『日野グループとしての環境保全活動のさらなる推進』『社会との共存』

の3つを柱に、右の5項目を目標として推進していきます。

取り組み項目			具体的な実施事項・目標等
エネルギー・温暖化	マネジメント	1	グローバルな事業活動における一層のCO ₂ 低減 ●グローバルなCO ₂ 低減の中長期シナリオ策定と確実な推進
	開発・設計	2	ディーゼル車メーカー「世界ダントツナンバーワン」の低排出ガス・低燃費性能を目指す ●低排出ガス要素技術およびシステムの最適制御技術の開発により、低排出ガス化を達成する ●超低燃費ディーゼルエンジンと空力抵抗極小化、および車両の最適制御により、業界トップレベルの燃費水準を達成する ●ハイブリッドシステムの一層の性能向上と販売拡大 ●重量車燃費：燃費規制適合車の早期市場供給を推進する
		3	エネルギー・燃料多様化に向けた技術開発 ●合成燃料等の評価と対応技術の研究開発
	生産・物流	4	各国／地域の生産・物流活動における、CO ₂ 低減 生産 物流 地域 項目 目標 グローバル 売上高当たり排出量 2003年度比10%低減 日野 売上高当たり排出量 1990年度比35%低減 日野 排出量 1990年度比10%低減 国内 排出量 1990年度比10%低減 海外 CO₂排出量の把握と低減活動拡大 2007年度までに実態を把握し目標管理へ移行
資源循環	開発・設計	5	2015年リサイクル実効率95%達成に向けた取り組みの着実な推進および早期達成 (1)リサイクル設計のさらなる推進と製品への確実な盛り込み ●リサイクル性向上設計の推進 (樹脂材料の統合、易リサイクル材への材料置換、部品種類の低減、耐久性の向上等) ●解体性向上のための設計基準整備と開発車への確実な盛り込み (2)リサイクル性(解体性)評価システムの充実 (3) 解体業者等、関連業者との連携強化 ●リサイクル、解体情報の展開 ●リサイクル材回収からリサイクル処理までの経路整備 ●使用済み部品の再利用の推進
	生産・物流	6	循環型社会に向けた資源有効利用の一層の推進 生産 物流 地域 対象 項目 目標 国内 排出物 売上高当たり排出量 2003年度比5%低減 日野 排出物 売上高当たり排出量 1990年度比50%低減 海外 廃棄物 各国トップレベル低減活動を推進 国内 梱包資材 使用量 1995年度比45%低減 海外 梱包資材使用量の把握と低減活動拡大
		7	水使用量低減 ●各国で個別に目標を設定し継続的に水使用量低減

目標設定項目

- (1) エネルギー・温暖化対策の推進
- (2) 資源循環の推進
- (3) 環境負荷物質の使用量低減
- (4) 大気環境の保全
- (5) 環境経営のさらなる推進

取り組み項目			具体的な実施事項・目標等																		
環境負荷	開発・設計	8	環境負荷物質の管理、低減の一層の推進 ●環境負荷4物質（鉛・水銀・カドミウム・六価クロム）の低減の推進と対象物質の拡大 ●車室内VOCの低減と対象物質の拡大																		
	生産・物流	9	PRTR法対象物質の排出量低減 ●塗装工程を中心としたPRTR法対象物質の排出量低減																		
			<table><tr><td></td><td>地域</td><td>項目</td><td>目標</td></tr><tr><td rowspan="2">生産</td><td>国内</td><td>排出量</td><td>1998年度比40%低減</td></tr><tr><td>海外</td><td colspan="2">各国規制より厳しい排出量目標を設定し低減活動を展開</td></tr></table>			地域	項目	目標	生産	国内	排出量	1998年度比40%低減	海外	各国規制より厳しい排出量目標を設定し低減活動を展開							
	地域	項目	目標																		
生産	国内	排出量	1998年度比40%低減																		
	海外	各国規制より厳しい排出量目標を設定し低減活動を展開																			
大気環境	開発・設計	10	各国／地域の都市大気環境改善に資する排出ガス低減																		
	生産・物流	11	塗装工程におけるVOC排出量低減対策																		
			●指定低公害車等の開発・設定 ●ポスト新長期排出ガス規制適合車の開発・商品化 ●US07、US10への対応技術の開発・商品化 ●Euro4、Euro5への対応技術の開発・商品化																		
			●塗装工程における洗浄シンナー使用量低減と塗料水性化採用等																		
			<table><tr><td></td><td>対象</td><td>地域</td><td>項目</td><td>目標</td></tr><tr><td rowspan="3">生産</td><td rowspan="2">ボディ塗装</td><td>国内</td><td>塗装面積当たり排出量</td><td>35g/m²以下（全ライン平均）</td></tr><tr><td>海外</td><td colspan="2">各国トップレベルのVOC排出量低減活動を展開</td></tr><tr><td>その他塗装</td><td>国内・海外</td><td colspan="2">VOC排出量低減活動を展開</td></tr></table>			対象	地域	項目	目標	生産	ボディ塗装	国内	塗装面積当たり排出量	35g/m ² 以下（全ライン平均）	海外	各国トップレベルのVOC排出量低減活動を展開		その他塗装	国内・海外	VOC排出量低減活動を展開	
	対象	地域	項目	目標																	
生産	ボディ塗装	国内	塗装面積当たり排出量	35g/m ² 以下（全ライン平均）																	
		海外	各国トップレベルのVOC排出量低減活動を展開																		
	その他塗装	国内・海外	VOC排出量低減活動を展開																		
環境経営	マネジメント	12	連結環境マネジメント強化																		
		13	ビジネスパートナーにおける環境マネジメントの一層の推進																		
			●仕入先と連携した活動の一層の充実 → 納入される部品、原材料、生産設備などに含まれる環境負荷物質の管理充実																		
		14	環境教育の充実																		
	15	LCAの考え方を踏まえた自動車環境総合評価体制の導入																			
	社会との連携	16	環境保全活動への参画貢献																		
		17	環境情報開示と双方向コミュニケーションの充実																		
18		持続可能な発展を踏まえた環境政策への積極的な貢献と提言																			
			●企画段階から環境対策を確実に織り込むエコファクトリー活動のグローバルな展開（違反・苦情ゼロ、環境リスクの最小化、各国・各地域NO.1の環境パフォーマンス） ●各事業体におけるCO ₂ などの環境パフォーマンスのグローバル管理と向上 ●グローバル環境会議の定期的な開催による、グループ一丸となった環境保全への取り組み																		
			●ディーゼルメーカートップレベルの日野自動車販売会社環境ガイドラインに基づく販社拠点の環境改善活動推進 → 環境関連法規に準じた適正な設備、作業管理の徹底 → エネルギー使用量、廃棄物排出量の把握による低減活動への取り組み																		
			●海外代理店のオペレーションより発生するCO ₂ 等の把握と目標管理の実施																		
			●従業員 の環境意識向上を目的とした環境教育の継続的実施																		
			●推進体制の構築と作業環境（データベース、システム構築等）の整備および運用																		
			●日野自動車グリーンファンドの運営を通じた社会貢献 ●長期的な視野に立った、環境教育等を通じての地域貢献																		
			●エコドライブ情報のお客様への提供 ●各国・地域での環境報告書の発行とさらなる充実 ●グローバルな地域社会とのコミュニケーションの充実																		
			●商用車グローバルミーティングの推進 ●経団連・自工会等産業界の環境取り組みの推進																		

日野自動車の環境マネジメントシステム

日野自動車では、すべての事業機能で環境マネジメントシステム(EMS)を構築し、本来の業務と環境保全とを結びつけて、効率的にEMSを運用しています。

また、これらのシステムについては定期的に厳正な環境監査をおこなっており、システムの有効性を確保しています。

日野自動車の認証取得状況

日野自動車では、2003年4月までに、本社機能、製品開発、生産技術、生産、部品物流・車両物流、国内事業および海外事業の統括拠点である田町事務所で、ISO14001の認証を取得しています。

これからは本業業務とEMSの結びつきを強め、より積極的に環境への取り組みを進めていきます。

認証取得状況

		認証取得日
本社・日野工場	生産機能、製品開発機能、生産技術機能、本社機能	2001年3月24日
羽村工場	生産機能	1999年3月10日
新田工場	生産機能	2000年3月27日
青梅部品センター 日高配車センター	物流機能	2002年1月11日
田町事務所	国内営業機能、海外営業機能	2003年4月25日

内部および外部環境監査

ISO14001に基づいた環境マネジメントシステムを運用するなかで、内部環境監査および審査登録機関による外部審査を実施しています。

2005年度の外部審査においては、右記の観察事項がありましたが、不適合はありませんでした。

審査結果

		重大な不適合	軽微な不適合	観察事項
本社・日野工場	サーベイランス	0	0	3
羽村工場	更新審査	0	0	2
新田工場	サーベイランス	0	0	3
青梅部品センター 日高配車センター	更新審査	0	0	3
田町事務所	サーベイランス	0	0	1

グリーン購入

事務用品、事務機器のグリーン購入をさらに積極的に推進するため、2001年9月に環境省の「グリーン購入法特定調達物品」などを参考に「グリーン購入ガイドライン」と「グリーン購入推進計画」を作成し、社内展開しました。2005年度は、目標を達成し、100%グリーン購入を継続して実施しています。



日野グループの環境保全活動

日野自動車では、自社における取り組みを推進するばかりではなく、国際規格であるISO14001の認証取得を活動の柱として、国内外関連会社、販売会社を含めた日野グループでの環境保全へ取り組んでいます。

国内関連会社の活動

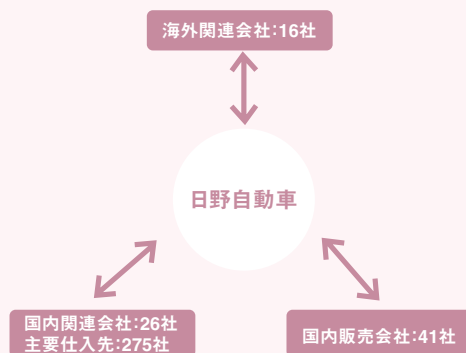
日野自動車は、国内全仕入先に対して、「環境に関する調達ガイドライン」を提示し、環境マネジメントシステムの構築をお願いしています。主要仕入先がISO14001認定を取得し、未取得仕入先についても、引き続き取得要請をおこなっていきます。加えて、今年度は、日本自動車工業会自主規制で推進している、SOC（環境負荷物質）の管理・低減について、より早い実現を図るために、全仕入先へ協力を要請しました。

また、主たる仕入先22社による「国内関連会社生産環境会議」を組織し、環境マネジメント活動を進めています。参加各社とは定期的な「環境懇談会」をおこない、環境意識向上を図るとともに、各分野における具体的目標を設定し、環境保全活動を実施しています。

海外関連会社の活動

海外生産系子会社6社を対象に「海外関連会社生産環境会議」を年2回開催しています。この会議は、各社の環境担当代表者が目標に対する活動進捗状況の報告と省エネ、省資源に向けた取組事例紹介をおこなうことによって、必要な情報が参加者間で共有されることはもちろん、各社が切磋琢磨しながらより一層の環境負荷低減を目指す雰囲気づくりを目的にしています。

とくに、2006年3月にHMMT社(タイ)で開催された会議では、2010年目標達成に向けた取組プランを各社代表が発表し、グループとして2010年目標を達成するための意思統一を図ることができました。



国内販売会社の活動

環境マネジメントの輪をよりお客様の身近なものへと広げていくため、毎年、整備工場をもつ国内すべての販売会社41社へ「販売会社環境ガイドライン」を発行しています。これは、日野自動車独自の環境マネジメント要求事項をとりまとめたものです。現在、このガイドラインへの適合性を監査し、すべての項目に適合した販売会社・拠点に対しては「エコ・マネジメントディーラー」としての認定をおこなっています。

国内販売会社41社中38社179拠点が「エコ・マネジメントディーラー」として認定されています。またそのうち5社がISO14001の認証を取得しています。

ISO・EMD取得状況

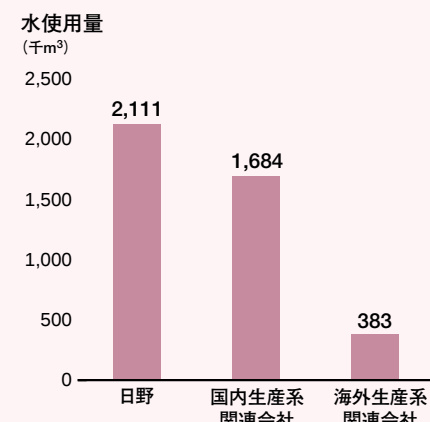
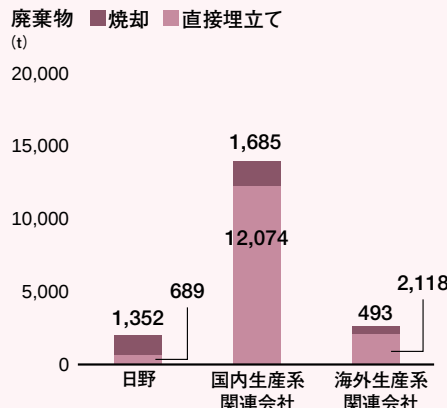
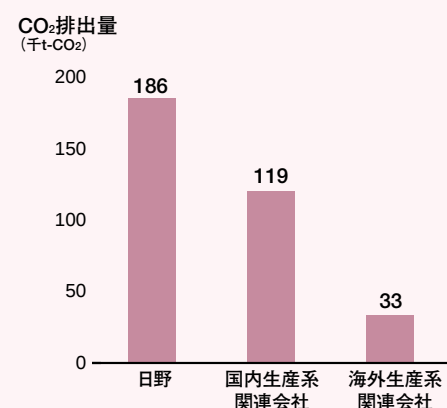
日野自動車グループのEMS構築状況

2006年3月末

	EMS構築		
	対象会社		ISO14001
	ISO14001	エコ・マネジメント	認証取得
国内 関連会社	22	22	—
主要仕入先	275	204	—
販売会社	41	5	38
海外 関連会社	5	3	—

エコ・マネジメントディーラー認定数にはISO14001認証取得会社も含む。エコ・マネジメントディーラーとは日野による認定(P.31参照)

2005年度日野グループ生産拠点の主要環境データ CO₂排出量・直接埋立・焼却廃棄物量・水使用量



環境教育とリスク管理

効果的な環境保全活動の実践を目指し、社員の環境意識高揚のため、環境教育・啓発活動を実施しています。
また、安全操業と環境負荷低減のため緊急時における対応法を策定するとともに、定期的に訓練を実施しています。

環境教育と啓発活動

効果的な環境保全活動の推進には、社員一人ひとりの環境保全意識を高めることが重要と考え、環境教育・啓発活動を積極的に実施しています。

1994年度からは、新入社員教育プログラムのなかに環境教育を組み込み、自動車産業を担う一員としての自覚と責任を学ぶ場となっています。

教育プログラム(2005年度受講者)

コース名	受講者数
新入社員教育	109人

環境関連資格保有者(2006年3月現在)

環境関連資格名称	保有者数
環境マネジメントシステム主任審査員	1人
環境マネジメントシステム審査員(補)	12人
公害防止管理者	77人
エネルギー管理士	23人

活動事例
全社5S活動キャンペーン

5Sとは、整理・整頓・清掃・清潔・しつけの頭文字のSを指します。日野自動車では、環境月間を契機に、全社で5S活動に取り組むことの重要性を再認識しました。「まずは、足元の環境5Sから! よし! やろう。見違えるまで、どこまでも」を合言葉に、全社5S活動を2004年6月から継続実施中です。

活動2年目となる今年は、各機能の担当役員を中心に全部署が自主的・精力的に5S活動を進めています。6カ月に1回、役員が自ら担当する機能以外の部署の5S状況を点検する「5Sクロス点検」を実施するなど、皆が楽しく切磋琢磨しながらレベルアップしています。まずは身の回りの環境から見つめ直す5S活動は、従業員の環境・安全意識の向上にも役立っています。環境への取り組みの一環として、国内外の関連会社にも活動を展開しています。

緊急時対応と環境関連事故

環境負荷低減のため、適正な運転基準、作業標準を定めて、安定した操業の維持管理に努めています。また、緊急時に組織的・効率的な活動ができるよう「緊急時の対応方法」を定めており、定期的に対応訓練を実施しています。

2005年度は、新田工場において油流出事故が1件発生しましたが、迅速に対応し、原因を究明して再発防止まで対策を施しました。

苦情・訴訟・製品リコール

2005年度は、環境に関する苦情が5件発生しました。内訳は、騒音・振動3件、臭気1件、油流出1件です。これらにつきましては、実態を調査し、適切な対応を実施しました。

2005年度の製品リコールは8件でした(P.38参照)。このうち環境に関連したものはありません。

環境に関しての訴訟では、自動車排出ガスの健康影響に関する訴訟において、2002年10月、自動車メーカーの賠償責任を認めない第一審判決が下りました。なお、原告の控訴により現在係争中です。

環境会計

日野自動車では、環境省「環境会計ガイドライン」をもとに、環境保全コストと効果を集計しています。
費用対効果を把握することで、効果的な環境投資をおこない、継続的に環境負荷を低減していくことを目的としています。

環境保全コスト

下表は環境省の「環境会計システム導入のためのガイドライン」を参考に、日野自動車が集計している環境コストを分類したものです。2005年度の環境保全コストの実績は、総額で249億円となりました(売上高比2.7%)。ただし、環境対応とそれ以外の目的のものと区別が難しい設備投資などについては、環境対応分が明確に把握できるもののみ計上しました。

環境保全コスト			単位：百万円（－は百万円未満）					
項目		主な取り組みの内容	2003年度		2004年度		2005年度	
			投資額	費用	投資額	費用	投資額	費用
①事業エリア内コスト	公害防止コスト	大気汚染、水質汚濁等の公害防止のためのコスト	48	339	314	430	8	262
	地球環境保全コスト	省エネルギー設備等の地球環境保全コスト	39	1	56	1	57	1
	資源循環コスト	リサイクル、廃棄物の処理等の資源循環コスト	3	412	2	448	－	460
	計		91	752	371	879	65	723
②上・下流コスト		環境負荷を減らすための追加的成本	－	－	－	－	－	－
		EMSの構築・運用・認証取得のためのコスト						
③管理活動コスト		環境負荷の監視・測定のためのコスト	－	419	－	435	－	429
		環境保全対策組織の人件費						
④研究開発コスト		環境保全対応製品の研究開発費	－	19,370	－	26,171	－	23,718
		環境負荷抑制のための研究開発費						
⑤社会活動コスト		自然保護、緑化等の環境改善対策コスト	－	5	－	5	－	5
		環境保全をおこなう団体等に対する寄付、支援のためのコスト						
⑥環境損傷対応コスト		自然破壊等の修復のためのコスト	－	－	－	－	－	－
		環境の損傷に対応する保険料						
合計			91	20,546	371	27,490	65	24,875
			20,637		27,861		24,940	

集計範囲の見直しにより、一部の項目で昨年の報告値から変更があります

環境保全効果

環境保全効果については、確実な根拠に基づくもののみ、単年度効果として算定しました。具体的には、省エネルギーによるエネルギー費の低減と廃棄物低減による処理費用の低減で、2005年度は総額で6億200万円となりました。

経済効果					単位：百万円
項目		2003年度	2004年度	2005年度	
収益	リサイクルによる事業収入等	439	692	565	
費用節減	省エネルギーによるエネルギー費の節減	27	39	28	
	省資源またはリサイクル活動による廃棄物処理費の節減	3	38	9	
合計		470	769	602	

集計範囲の見直しにより、一部の項目で昨年の報告値から変更があります

物量効果			
項目	2003年度	2004年度	2005年度
CO ₂ 低減[t-CO ₂]	659	631	2,978
廃棄物低減[t]	1,435	1,300	255

本社・日野工場



ISO14001認証取得／2001年3月24日



本社・日野工場
環境管理統括者
(現：製造機能統括役員)

藤本 慎治

「地域と地球環境に調和した工場」を目指します

日野工場の周囲は住宅地が隣接していることから、工場の運営は地域との共存が必須要件です。騒音や振動、臭気といった感覚公害で、地域の皆様にご迷惑を絶対におかけしないよう、設備や工程の改善を計画的かつ継続的に実施しています。併せて自主パトロールで境界内外の監視をおこない、「問題を起こさない、絶対に迷惑をかけない」に従業員全員が認識を持って活動しています。

さらに、近隣住民の方々と懇談会や交流イベントへの招待、地域清掃などを通じて、コミュニケーションを図っています。

私たちは企業市民として、「地域と地球環境に調和した工場」を目指し、環境保全活動を推進していきます。

●工場概要

所在地／東京都日野市日野台3丁目1番地1

主要製品／大型トラック「日野プロフィア」
中型トラック「日野レンジャー」

従業員数／5,203人(2006年3月末現在)

敷地面積／447,081m²

延床面積／399,983m²

平成17年度関東地区電気使用合理化委員会

最優秀賞受賞



本社・日野工場 環境方針

1. 地域との融和、環境との共生
2. 環境汚染の未然防止と継続的改善
3. 法規等の遵守
4. ムダを出さない、ムダに使わない
5. 一人ひとりの気持ちから

●工場の地域貢献活動

日野工場さくらまつり 2005年4月

近隣住民懇談会 2005年7月、12月

工場周辺の地域清掃 2005年7月、9月

日野工業高等学園諸活動

市内公園の草刈りと池堀り 2005年8月

通学路のゴミ拾い 2005年12月



水質(水質汚濁防止法、都条例)

放流水水質分析(河川放流……放流先：谷地川經由多摩川)

項目	規制値	最大	最小	平均
排出量[m ³ /日]	—	5,503	1,181	2,510
pH[—]	5.8～8.6	7.3	6.8	7.0
BOD[mg/ℓ]	20	3.1	0.5	1.3
COD[mg/ℓ]	—	14.0	6.6	9.2
SS[mg/ℓ]	40	8.0	ND	2.6
N-ヘキサン[mg/ℓ]	5	ND	ND	ND
全リン[mg/ℓ]	2	1.0	0.2	0.6
全窒素[mg/ℓ]	20	14.7	1.3	6.9
亜鉛含有量[mg/ℓ]	5	0.04	ND	0.02
フッ素化合物[mg/ℓ]	15	0.29	0.16	0.23

ND：定量下限値以下(検出されない)

大気(大気汚染防止法、都条例)

施設名	測定項目	規制値	最大	最小	平均
ボイラー(都市ガス)	NOx[ppm]	45	34	21	28
	ばいじん[g/Nm ³]	0.1	ND	ND	ND
コージェネ(都市ガス)	NOx[ppm]	35	25	16	22
	ばいじん[g/Nm ³]	0.05	0.003	0.001	0.002
浸炭炉1号(都市ガス)	NOx[ppm]	180	123	120	122
	ばいじん[g/Nm ³]	0.2	0.001	0.001	0.001

ND：定量下限値以下(検出されない)

化学物質(PTR法)

単位：t/年

政令 第1種指定 番号 化学物質	取扱量	排出量		移動量		リサイ クル量	除去 処理量	消費量
		大気	水質	廃棄物	公共下水道			
1 亜鉛の水溶性化合物	3.9	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	2.8
30 ビスフェノールA型エポキシ 樹脂(液状のものに限る)	1.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	1.2
40 エチルベンゼン	18.0	11.7	0.0	0.2	0.0	1.6	1.3	3.1
43 エチレングリコール	437.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	437.8
63 キシレン	79.9	53.8	0.0	0.2	0.0	1.6	8.5	15.7
177 スチレン	8.9	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.4
224 1,3,5-トリメチルベンゼン	3.2	0.8	0.0	0.2	0.0	2.1	0.1	0.0
227 トルエン	47.0	21.5	0.0	0.2	0.0	0.0	2.3	23.1
299 ベンゼン	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1
311 マンガンおよびその化合物	1.6	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	1.1
合計	602.5	88.4	0.1	2.3	0.0	5.3	12.2	494.3

・取扱量1t以上が対象(特定第1種指定化学物質は500kg以上)

・除去処理量：焼却処理・分解処理などにより除去した量

・消費量：反応により他物質に変化したり、製品に含有もしくは付随して場外へ持ち出される量



羽村工場
環境管理統括者
渡辺 和彦

私たちは「環境に優しい工場」を目指します

羽村工場では「自然と調和した事業活動の推進」を環境方針に掲げ、「環境に優しい工場」を目指して環境保全に取り組んでいます。

省エネや省資源活動はもとより、安全や品質を改善することで、清々とした仕事の流れを確保し、工場全体として環境負荷を低減しています。

2005年度は足元の環境保全である“5S活動”に積極的に取り組み、とくに“2S（整理・整頓）”に力を入れました。2Sを進め、「ムダ、ムラ、ムリ」をなくし、きれいで働きやすい工場を実現しています。

地域社会とのパートナーシップを大切にするのも羽村工場の特長。地域の皆様との交流を積極的にこなっています。また、日野グループの海外展開にともない、海外工場の親工場として、環境保全と2Sを積極的に展開し、グループとしても「環境に優しい工場」を目指しています。

●工場概要

所在地／東京都羽村市緑ヶ丘3丁目1番地1

主要製品／小型トラック「日野デュトロ」「ダイナ」
「ハイラックスサーフ」「FJクルーザー」
「ルートバン」「タウンエース」

従業員数／2,675人(2006年3月末現在)

敷地面積／750,770m²

延床面積／379,043m²

2004年(10月)高圧ガス保安協会会長賞受賞

2005年(2月)資源エネルギー庁長官賞受賞

2005年(11月)東京消防庁予防部長賞受賞

2006年(2月)関東地区電気使用合理化委員会

最優秀賞受賞



羽村工場 環境方針

1. 自然環境と調和した事業活動の推進
2. 限りある資源の有効活用
3. 地域社会とのパートナーシップの構築

●工場の地域貢献活動

羽村工場さくらまつり 2005年4月

チューリップ祭りへの協力 2005年4月

労働組合によるカーブミラー清掃 2005年4月、9月

羽村市夏祭りへの協力 2005年7月

羽村市産業祭りへの協力 2005年11月

羽村市商工会への協力 2005年9月



水質(下水道法) 放流水水質分析(下水道放流)

項目	規制値	最大	最小	平均
排出量[m ³ /日]	—	3,246	41	1,570
pH[—]	5.7～8.7	7.3	6.3	6.8
BOD[mg/ℓ]	300	5.5	1	2.3
SS[mg/ℓ]	300	16	2	4.88
N-ヘキサ[mg/ℓ]	5	ND	ND	ND
全リン[mg/ℓ]	20	11.1	0.12	0.6
全窒素[mg/ℓ]	150	16.9	2.29	6.9
亜鉛含有量[mg/ℓ]	5	0.04	ND	0.02
フッ素化合物[mg/ℓ]	15	1.6	0.75	1.18

ND:定量下限値以下(検出されない)

大気(大気汚染防止法、都条例)

施設名	測定項目	規制値	最大	最小	平均
ボイラー(重油)	NOx[ppm]	100	87	44	68
	ばいじん[g/Nm ³]	0.25	0.007	0.004	0.005
コージェネ(重油)	NOx[ppm]	950	800	780	790
	ばいじん[g/Nm ³]	0.1	0.049	0.039	0.044
コージェネ(都市ガス)	NOx[ppm]	35	26	20	23
	ばいじん[g/Nm ³]	0.05	ND	ND	ND
乾燥炉(都市ガス)	NOx[ppm]	180	91	9	29
	ばいじん[g/Nm ³]	0.1	0.025	ND	0.006
焼却炉(重油)	NOx[ppm]	250	110	100	105
	ばいじん[g/Nm ³]	0.5	0.002	ND	0.001
	塩化水素[mg/Nm ³]	750	90	17	54
	ダイオキシン[ng-TEQ/Nm ³]	5	1	0.47	0.74

ND:定量下限値以下(検出されない)

化学物質(PRTR法)

単位:t/年(ダイオキシン類はmg-TEQ/年)

政令 第1種指定 番号 化学物質	取扱量	排出量		移動量		リサイ クル量	除去 処理量	消費量
		大気	水質	廃棄物	公共下水道			
1 亜鉛の水溶性化合物	10.2	0.0	0.0	3.0	0.1	0.0	0.0	7.2
16 2-アミノエタノール	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	0.2
30 ビスフェノールA型エポキシ樹脂(液状のものに限る)	8.5	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	1.1	7.2
40 エチルベンゼン	118.2	70.7	0.0	0.0	0.0	13.7	13.0	20.8
43 エチレングリコール	848.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	848.4
44 エチレングリコールモノエチルエーテル	24.0	24.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
63 キシレン	357.5	184.9	0.0	0.0	0.0	32.3	36.0	104.3
101 酢酸2-エトキシエチル	38.9	37.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
176 有機スズ化合物	1.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	1.1
179 ダイオキシン類(mg-TEQ)	0.0	(29.1)	0.0	(200)	0.0	0.0	0.0	0.0
224 1,3,5-トリメチルベンゼン	40.3	16.9	0.0	0.0	0.0	18.9	4.5	0.0
227 トルエン	310.8	136.4	0.0	0.0	0.0	0.0	22.1	152.2
232 ニッケル化合物	1.7	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.9
272 フタル酸ビス(2-エチルヘキシル)	1.8	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	1.7
299 ベンゼン	7.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.9
311 マンガンおよびその化合物	18.7	0.0	0.0	1.2	0.1	0.0	0.0	17.4
合計	1,790.1	470.4	0.0	5.6	0.2	64.9	80.9	1,168.1

・取扱量1t以上が対象(特定第1種指定化学物質は500kg以上)

・除去処理量:焼却処理・分解処理などにより除去した量

・消費量:反応により他物質に変化したり、製品に含有もしくは付随して場外へ持ち出される量

新田工場



ISO14001認証取得／2000年3月27日



新田工場
環境管理統括者
(現：日野工場副工場長)

山本 新太郎

「人と環境にやさしい、進化する工場」を目指します

緑豊かな新田工場は、「新田工場 環境方針」のもと、工場のすべての活動の中で環境への影響を考え、環境保全・改善活動を推進しています。

「法規制の遵守」「地域との融和」はもとより、環境への影響の大きいCO₂や環境負荷物質、廃棄物の低減については、より高い目標に全員でチャレンジし、一人ひとりが環境保全に貢献する大切さを感じながら、「人と環境にやさしい、進化する工場」を目指していきます。

●工場概要

所在地／群馬県太田市新田早川町10番地1

主要製品／中型および小型トラック用エンジン

大型および中型トラック用トランスミッション

中型トラック用アクスル

従業員数／1,089人(2006年3月末現在)

敷地面積／393,932m²延床面積／190,709m²

2002年度資源エネルギー庁長官賞

(電気部門)受賞

2003年度経済産業局省エネ活動優秀

グループ賞受賞

2004年度資源エネルギー庁長官賞(熱部門)受賞



新田工場 環境方針

1. 地域との融和、環境との共生
2. 未然防止を基本に
3. 法規の遵守
4. ムダを出さない、ムダに使わない
5. 一人ひとりの気持ちから

●工場の地域貢献活動

澤藤電機(株)との早川合同清掃 2005年5月、9月

太田市新田産業祭に出展 2005年10月

秋祭り開催(参加者2,700人) 2005年10月

地域との情報交換会 隔月1回



水質(水質汚濁防止法、県条例、地元自治体との環境汚染防止協定)

放流水水質分析(河川放流……放流先：早川)

項目	規制値	最大	最小	平均
排出量[m ³ /日]	—	963	58	532
pH[—]	6.0～8.0	7.7	7.1	7.5
BOD[mg/ℓ]	10	2	ND	1.4
SS[mg/ℓ]	15	3	ND	2
N-ヘキサン[mg/ℓ]	3	ND	ND	ND
全リン[mg/ℓ]	8	0.4	0.2	0.3
全窒素[mg/ℓ]	60	17	4.8	9.3
亜鉛含有量[mg/ℓ]	1	0.08	0.04	0.06
フッ素化合物[mg/ℓ]	1.5	ND	ND	ND

ND：定量下限値以下(検出されない)

大気(大気汚染防止法、県条例、地元自治体との環境汚染防止協定)

施設名	測定項目	規制値	最大	最小	平均
ボイラー10t(重油)	NOx[ppm]	180	—	—	—
	ばいじん[g/Nm ³]	0.10	—	—	—
連続炉1号(灯油)	NOx[ppm]	180	85	69	79
	ばいじん[g/Nm ³]	0.1	0.028	0.006	0.016

化学物質(PRTR法)

単位：t/年

政令 第1種指定 番号 化学物質	取扱量	排出量		移動量		リサイ クル量	除去 処理量	消費量
		大気	水質	廃棄物	公共下水道			
25 アンチモンおよびその化合物	5.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	5.1
40 エチルベンゼン	18.6	17.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	1.1
43 エチレングリコール	25.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
63 キシレン	33.6	22.8	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	10.7
68 クロムおよび3価クロム化合物	55.4	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	54.3
2241,3,5-トリメチルベンゼン	6.8	6.7	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
227 トルエン	48.7	40.5	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	8.1
232 ニッケル化合物	1.4	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	1.3
266 フェノール	9.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.9	0.0
311 マンガンおよびその化合物	22.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	21.2
346 モリブデンおよびその化合物	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.9
合計	246.5	87.4	0.0	27.6	0.0	0.0	9.9	121.7

・取扱量1t以上が対象(特定第1種指定化学物質は500kg以上)

・除去処理量：焼却処理・分解処理などにより除去した量

・消費量：反応により他物質に変化したり、製品に含有もしくは付随して場外へ持ち出される量

青梅部品センター

●センター概要

所在地／東京都青梅市末広町1丁目5番1号

事業内容／サービス部品の管理・発送

従業員数／71人(2006年3月末現在)

敷地面積／26,288m²

延床面積／31,533m²

青梅部品センター環境方針

1. 環境との共生
2. 未然防止と継続的改善
3. 法規等の遵守
4. スリムなモノの流れ
5. 一人ひとりの気持ちから



ISO14001認証取得／
2002年1月11日



▲青梅部品センター

トラック・バスのサービス部品の管理と、全国へ向けた発送をおこなっています。

日高配車センター

●センター概要

所在地／埼玉県日高市上鹿山689番地1

事業内容／製品(トラック)の管理・発送

従業員数／20人(2006年3月末現在)

敷地面積／265,989m²

延床面積／9,865m²

日高配車センター環境方針

1. 環境との共生
2. 未然防止と継続的改善
3. 法規等の遵守
4. スリムなモノの流れ
5. 一人ひとりの気持ちから



ISO14001認証取得／
2002年1月11日



▲日高配車センター

完成した製品(トラック)の一括管理、架装メーカー等への発送をおこなっています。

田町事務所

●事務所概要

所在地／東京都港区芝4丁目11番3号

事業内容／自動車の販売と統括

従業員数／449人(2006年3月末現在)

敷地面積／1,136m²

延床面積／8,743m²

田町事務所 環境方針

1. 環境においても、お客様からの一層の信頼を
2. 環境汚染の予防と継続的改善
3. 法規等の遵守
4. ムダを出さない、ムダに使わない
5. 一人ひとりの気持ちから
6. 全国の販売会社とともに



ISO14001認証取得／
2003年4月25日



▲田町事務所

国内外営業部門の統括オフィスです。

環境への取り組み経緯

年	マネジメント・生産	製 品	社会の動き
1990	1990.12 ■ 日野工場コージェネ導入		
1991	1991.7 □ 財団法人日野自動車グリーン ファンド設立	1991.4 ディーゼルエンジン・電気 ハイブリッド車(HIMR)発売	
1992	1992.4 ■ 羽村クリーンセンター導入 1992.5 ■ 鋳造の離型剤に使用していた 特定フロン(フロン113)使用全廃		1992 リオデジャネイロ・地球サミット 1992 中期ブレーキ規制設定
1993	1993.3 □ 「日野地球環境憲章」策定 □ 「日野地球環境行動計画」策定 □ 日野環境委員会設置 ■ 生産環境委員会設置	1993.3 環境技術委員会設置 1993.5 リサイクル法に基づく事前評価実施 要領発行 カーエアコン用特定フロンを代替フロン に変更完了	1993 環境基本法制定 1993 自動車NOx削減法施行
1994	1994.6 ■ 部品洗浄用に使用していた トリクロロエタンの使用全廃 1994.12 ■ 羽村工場コージェネ2号機導入		1994 平成6年排出ガス規制
1995		1995.2 コモンレール式燃料噴射システム搭 載車発売	
1996	1996.3 □ 「日野地球環境活動計画」 第1回改定		
1997	1997.3 ■ 新田工場鋳物砂再生装置導入		1997 京都でCOP3開催
1998	1998.11 ■ ダイオキシン対策として 小型焼却炉を廃止	1998.2 使用済み自動車リサイクル・イニシア ティブ「自主行動計画」発表	
1999	1999.3 ○ 羽村工場ISO14001認証取得		1999 平成11年排出ガス規制
2000	2000.3 ○ 新田工場ISO14001認証取得 2000.9 □ 環境報告書発行	2000.2 バルスEGRシステム搭載車発売	
2001	2001.2 □ 「日野地球環境憲章」第1回改定 □ 「日野自動車環境VP」策定 2001.3 ■ 3工場ゼロエミッション達成 ○ 本社・日野工場ISO14001 認証取得	2001.12 国内初5気筒ターボインター クーラーエンジン搭載車発売	2001 平成13年騒音規制
2002	2002.1 ○ 青梅部品センター・ 日高配車センター ISO14001 認証同時取得 □ リサイクル委員会設置 □ 販社環境委員会設置 2002.7 □ 「販売会社環境ガイドライン」発行 2002.9 □ 「環境に関する調達ガイドライン」 発行	2002.2 新型ハイブリッド自動車(バス) 「新型HIMR路線バス」が 省エネ大賞 資源エネルギー庁 長官賞を受賞	2002 自動車NOx・PM法施行 2002 ヨハネスブルグ・地球サミット
2003	2003.4 ○ 田町事務所ISO14001認証取得	2003.8 超低PM認定「四ツ星」 小型トラック発売 2003.10 超低PM認定「四ツ星」 中型・大型トラック発売	2003 平成15年排出ガス規制
2004	2004.8 ■ 日野工場フレーム脱臭装置導入 2004.9 ■ 新田工場コージェネ導入	2004.4 新開発中型ハイブリッドトラック発売 2004.8 超低PM認定「四ツ星」小型バス発売	2004 平成16年排出ガス規制
2005	2005.4 ■ 新田工場排水処理設備増強	2005.5 平成17年排出ガス規制適合中型ト ラック発売 2005.8 平成17年排出ガス規制適合大型観 光バス発売	2005 自動車リサイクル法施行 2005 京都議定書発効 2005 平成17年排出ガス規制 2005 愛・地球博開催
2006		2006.2 平成17年排出ガス規制適合大型ト ラック発売	

注釈

○ ISO □ マネジメント ■ 生産

注釈

国内 海外

編集後記

日野自動車の『環境・社会報告書』をご覧ください、ありがとうございます。本年の報告書では、主に次のようなことに注意を払いながら編集をおこないました。

1.「ご覧いただく皆様に日野自動車の環境や社会に対する取り組みや姿勢をわかりやすくお伝えする」

2.「私たちがつくっているトラック・バスが、日々の生活に密接に関係していることをお伝えする」

具体的には、日野自動車がつくっているトラック・バスが皆様の身近にあり、活躍していることをお伝えするために、冒頭に事業紹介(p1～2)を設けました。

次のトップインタビュー(p3～4)では、日本ユニセフ協会大使として活躍され、教育学博士でもあるアグネス・チャンさんと近藤社長との対談をおこない、第三者の立場からのご質問にお答えする形で日野自動車の取り組みをご紹介します。

また、特集記事(p7～14)では、「安全・安心」、「お客様へのお役立ち」について、日野

自動車の取り組みの最前線を担当者のインタビューを交え、ご紹介しております。

これからも皆様に、人と物の移動を支え、社会とともに成長することを目指す日野自動車の取り組みをご理解いただけるよう、皆様が求められている情報をより多く、よりわかりやすくお伝えしていきたいと考えております。皆様からの忌憚のないご意見・ご感想をいただきたくお待ちしております。



地球温暖化防止の国民運動「チーム・マイナス6%」に参加

日野自動車は、地球温暖化防止の国民運動である「チーム・マイナス6%」に参加し、従来からの省エネ活動などの取り組みをより一層推進して、CO₂排出量抑制に努めています。



発行部署／日野自動車株式会社 総合企画部、環境部

東京都日野市日野台3丁目1番地1

問い合わせ先／総合企画部

TEL.042-586-5005

FAX.042-586-5299

発行／2006年7月

ホームページ／<http://www.hino.co.jp/>



この印刷物は、有害廃液を排出しない「水なし印刷」方式を採用しています。
またインキには、VOC（揮発性有機化合物）成分フリーのインキを使用し、
適切に管理された森林からの原料を含むFSC認証紙を使用しています。